

昔經樊鄧役。阻潮梅根渚。感憶追往事。意滿辭不斂。
寶月の作は、

郎作三十里行。儂作九里送。拔儂頭上釵。與郎資路用。有信數寄書。無信心相憶。莫作瓶
落井。一去無消息。
又二首、

大編珂峩頭。何處發揚州。借問編上郎。見儂所歡不。

初發揚州時。船出平津泊。五兩如竹林。何處相尋博。
後に賈客樂といふも、全く同じである。

【詩意】上客として奉られて居るのは、荆州の商人であるし、その席に侍して居る若い女は、揚
州の娼妓である。荆州の商人は、金を澤山持つて居るから、どこでも、おもふ儘に歡樂を極めるこ
とが出来るので、必ずしも、故郷の事を打忘れ、旅で游蕩三昧を盡して居る譯でもない。

【餘論】荆商の豪富を斂したので、後半十字、その游冶の状を想見せしめる。

權歌行

權歌行

溶漾漢潭清。寒荷趁浪平。

溶漾として漢潭清く、荷を攀つて浪の平かなるを趁ふ。

船輕知體弱。簪滑見鬟傾。

船、輕くして體の弱きを知り、簪、滑かにして鬟の傾く」
「を見る。」

落日懸江思。浮雲結浦情。

落日、江思を懸け、浮雲、浦情を結ぶ。

去從千葉隱。歸愛一花迎。

去つて、千葉の隱すに従せ、歸つて一花の迎ふるを愛す。

吳歎并子夜。誰似權歌聲。

吳歎、并せて子夜、誰か似む權歌の聲。

【字解】

【一】溶漾。水の満ち溢へたる貌。蘇軾の時に孤帆信溶漾。弄此半篙碧とある。【二】漢潭。漢水の淵。【三】寒荷。蓮の花を采る。【四】千葉。蓮の葉の重り合ふをいふ。【五】吳歎。吳都賦に荆豔楚舞、吳歎越吟とあつて、吳地の歌をいふ。【六】子夜。樂府題解に「舊史に云ふ、晉に女子あり、子夜といふ、作るところの聲、至つて哀し。晉の武帝の太和中。邯鄲王軻の家に鬼あつて、これを歌ふ、後人、四時に依つて、これが詞を爲り、子夜吳聲四時歌といふなり」とある。もとは、歌を善くする女の名、後には歌の名となつた。【七】權歌。舟歌、梁の簡文帝の時に從來入絃管、誰在權歌前とある。

【題義】權歌行は、樂府正聲に「相和歌辭、瑟調曲」とあり。樂錄に「王僧虔の技録に云ふ、權歌行の歌、明帝、王者布大化の一篇、或は云ふ、左延年の作、今歌はず。梁の簡文帝、東宮に在り、更めて歌を製す。少しく此に異なるなり」とあり、題解に「晉樂、魏の明帝の辭を奏して云ふ、王者布大化と。備さに平吳の勳を言ふ。晉の陸機の遲遲春欲暮、梁の簡文帝の妾住在湘川の若きは、但だ舟に乘じ、權を鼓するを言ふのみ」とあつて、後世は、すべて、この類である。念の爲め、陸機、簡文の二作を左に引抄して置く。

遲遲暮春日。天氣柔且嘉。元吉隆初已。濯穢游黃河。龍舟浮鶴首。羽旗垂藻葩。乘風宜飛景。逍遙戲中波。名謳激清唱。榜人縱權歌。投綸沈洪川。飛繳入紫霞。

陸機

妾家住湘川。菱歌本自便。風生解刺浪。水深能捉船。葉亂由牽荇。絲飄爲折蓮。澱妝疑薄汗。霑衣似故漣。浣紗流暫濁。汰錦色還鮮。參同趙飛燕。借問李延年。從來入絃管。誰在權

歌前。

簡文帝

【詩意】溶溶漾漾として、漢水の淵は、水の色も極めて清く、その岸邊に近き浅い處には、蓮の花が咲いて居るから、若い女は、それを采らむが爲に、舟に乗り、浪の平かなるを趁うて、だんだんと漕ぎ寄せて来た。その船の輕げに浮ぶに因つて、乗つて居る女の體の纖弱なるを知り、簪が滑り落ちた爲に、雲鬢が半ば傾いて見える。落日は江上の思を懸け、浮雲は極浦の情緒を結ぶやうである。やがて、大きな蓮の葉の簇つて居る間に漕ぎ入つて、その姿の隠るるに任せたが、さして、得るところなく、又漕ぎ戻ると、一つの蓮の花が心ありげに相迎ふるが如く、取り敢へず、これを采つて、ひどく心に愛でて歌ひ出した。その權歌の聲の優しくして風情あるは、到底、吳歎・子夜の及ぶところではない様に思はれた。

【餘論】主として、采蓮の女の權歌を唱へる様を敘したのである。落日の二句は、對偶を以て之を行り、江思浦情などは、獨瓶に係るものと思はれる。その意味は、落日浮雲、これを江浦の間に見て、

愈よ情思あるを覺えるといふ丈であるが、空靈縹緲の趣がある。

雞鳴歌

雞鳴の歌

北斗城邊北斗低

北斗城邊、北斗低し、

萬家夢破一聲雞

萬家夢は破る、一聲の雞。

馬蹄踏踏車轆轤

馬蹄踏踏、車轆轤

關下連趨市中逐

關下には連りに趨つて市中には逐ふ。

雄雞安得噤爾聲

雄雞、安んぞ爾の聲を噤するを得む。

利名少息世上爭

利名、少しく世上の争を息むれば、

漫漫夜長人不驚

漫漫、夜長くして、人驚かざらむ。

門旁の巨屋、史記高祖本紀に「蕭丞相、未央宮を營み、東闕北闕を立つ」とあり、釋名に「闕は門の兩旁に在り、中央闕然として道

【題義】雞鳴歌は、樂府詩集に「雞鳴歌辭」とあり、廣題に「漢に雞鳴衛士あり、宮外に雞唱するを

主る。舊儀、宮中と臺と、竝に雞を畜ふことを得ず、晝漏盡きて夜漏起れば、中黃門、五夜を持し、甲夜畢つて乙に傳へ、乙夜畢つて丙に傳へ、丙夜畢つて丁に傳へ、丁夜畢つて戊に傳ふ。戊夜これを五更と爲す。未明三刻、雞鳴けば、衛士起唱す。漢書に曰く、高祖、項羽を垓下に圍む。羽、この夜、漢軍の四面皆楚歌するを聞く。應劭曰く、楚歌は雞鳴歌なり。晉太康地記に曰く、後漢の固始、銅陽・公安・細陽、四縣の衛士、この曲を闕下に習うて之を歌ふ。今の雞鳴歌、是れなり、と。然らば、この歌は、蓋し漢歌ならむ。按ずるに、周禮、雞人、大祭祀を掌る。夜旦を啼いて、以て百官を罷むと、すなはち起るところ亦た遠しとある。すると、雞鳴歌は、周禮に雞人、漢の雞鳴衛士あるに因み、雞鳴に因つて興を起し、早晚の光景を敍したもので、その古詞は即ち左の如くである。

東方欲明星爛爛。汝南晨雞登壇喚。曲終漏盡嚴具陳。月沒星稀天下旦。千門萬戶遞魚鑰。宮中城上飛鳥鳴。

無論、青邱も、此詞を本とし、その上に聊か新意を出さむことを試みたのである。なほ、相和歌辭に雞鳴篇といふのがあるが、それは、題解に「劉孝標の雞鳴篇、但だ雞を詠するのみ」とあつて、この雞鳴歌とは、全然異なつて居る。

【詩意】北斗城と稱せらるる長安の城北に於ては、北斗が下に沈み、夜は將に明けむとし、雞が一聲高く歌ひ出すと共に、萬家の夢は破られて、城中の人は、すべて起き出でた。すると、馬蹄の音はば

こぼこ、車輪の響はぎいぎいと、相交つて聞こえ、それが外城の大門より入つて、市中に向ひ、互に相逐ふが如く、まことに騒がしい。あはれ、雄雞よ、どうかして汝の聲を止めて鳴かぬ様にすることは出来ぬか。さうすれば、利名に關する世上の争闘も、少しく止み、朝まだきから、人が騒ぎ立てることもなく、夜は漫漫として長く、すべての人は、靜に、のんきに、驚くことなくして、十分に眠ることも出来るであらう。

【餘論】雞鳴を以て、市朝喧闐の因となし、そこで雄雞をして其聲を噤せしめたいといつたのである。この雄雞の七字は單句、前後の關鍵となつて、極めて緊健にして力あるを覺える。

華山畿

華山畿

華山畿、牛車止。

華山畿、牛車止まる。

不同生、可同死。

同じく生きざるも、同じく死すべし。

棺開棺開。

棺開け、棺開け。

與郎去來。

郎と去らむ。

【字解】
 華山畿 地名。
 去來 歸去來の來と同じく、も
 と語助であつて、意味はない。

【題義】華山畿は、樂府正聲に「清商吳聲歌曲」とあり、樂錄に詳しく其由來を敍して「宋の少帝の

時、南徐の一士子、華山畿より雲陽に往かむとし、客舎の女子を見て、これを悦ぶも因なく、遂に心疾に感ず。母、爲に華山に至つて尋訪し、女を見る。女、聞いて之を感じ、因つて蔽膝を脱し、母をして密に其席上に置いて、之に臥さしめ、當に已ゆべしといふ。少日果して差ゆ。忽ち席を擧げて蔽膝を見、抱持吞食して死す。葬時、車、華山より度る、女の門に至る比、牛、肯て進まず。女、妝點沐浴して出で、歌うて曰く、

華山畿。君既爲儂死。獨活爲誰施。歡若見憐時。棺木爲儂開。

棺、聲に應じて開き、女、遂に棺に入る。家人叩打、これを如何ともするなし。乃ち合葬し、呼んで神女冢といふ」とある。青邱の此詩は、取りも直さず、その女の作つた古詞に擬したのである。

【詩意】ここに、送葬の行列が華山畿に差しかかると、棺を載せて居た牛車が、はたと止まつた切りで動かない。われと郎と、たとひ、一緒に生活したことは無かつたにしても、もろともに死して、同穴の好を全うすることは出来る。棺よ開け、棺よ開け、われは、これより郎と共に、遠く地下黄泉に向つて去るであらう。

【餘論】辭旨剴切、古詞に比して、更に、一層を進めた感はあるが、短篇零章、もとより詞彩の美を望むことは出来ぬ。

長安有狹斜行

長安に狹斜あり行

長安有狹斜。狹斜僅容騎。

長安に狹斜あり、狹斜、わづかに騎を容る。

路逢兩俠童。廻鞭問君第。

路に逢ふ兩俠童、鞭を廻して君の第を問ふ。

君第渭橋西。覓難復迷。

君の第、渭橋の西、覓め易くして復た迷ひ難し。

長子侍溫室。次子籍金閨。

長子は溫室に侍し、次子は金閨に籍す。

少子備宿衛。光耀與兄齊。

少子は宿衛に備はりて、光耀兄と齊し。

三子每來返。雜沓擁輪蹄。

三子毎に來り返り、雜沓、輪蹄を擁す。

大婦彈鷓鴣。中婦舞前溪。

大婦は鷓鴣を彈じ、中婦は前溪を舞ふ。

小婦勸杯酒。能唱白銅鞮。

小婦は杯酒を勸め、能く唱ふ白銅鞮。

丈人莫遽起。庭樹未烏栖。

丈人、遽に起つ莫れ、庭樹、未だ烏栖ます。

【字解】【一】狹斜、狭い小路。【二】廻鞭、馬を廻すに同じ。【三】渭橋、前に相連行に見ゆ。【四】溫室、殿名、三輔黃圖に

「溫室殿は武帝建つ、冬、これに處れば溫煖」とある。【五】籍金閨、謝康の詩に既通金閨籍とあつて、その注に「金閨は即ち金門、宦者の署、承明金馬著作の庭」とある。今でいへば侍從式部の詰所。【六】宿衛、史記齊悼惠王世家に「哀王三年、その弟、入つて漢宮に宿衛す。太后封して朱虛侯となす。四年、章の弟興居を封じて東牟侯となし、皆長安中に宿衛す」とある。宮城を警備する

役、今で云へば皇宮警視。【七】光輝 光彩に同じ。【八】雜音 ことごとた込み合ふ。【九】輪蹄 車馬に同じ。【一〇】大婦 長子の妻、以下皆これに倣ふ。【一一】關雎 前に王明君の詩に關雎といへると同じ、關雎の筋を張つて鼓とした琵琶。【一二】前溪 宋書樂志に「前溪歌は、晉の車騎將軍沈玩製するところ」とあり、樂府題解に「舞曲なり」とあり。寶字記に「前溪は、烏程縣南に在り、東、太湖に入る、これを風濤といふ」とあり、前溪歌に、憂思出門倚、逢郎前溪渡、莫作流水心、引新都會故とある。【一三】白銅鑊 樂府題解に「都邑二十四曲、白銅鑊歌あり、亦た襄陽白銅鑊といふ」とある。【一四】丈人 長老の尊稱、ここでは前の三子の父親。【一五】庭樹未烏栖 李白の烏栖曲に姑蘇城上烏栖時とある。

【題義】長安有狹斜一行は、樂府正聲に「相和歌辭、清商曲」とあり、樂府詩集に「相逢行、一に曰く、相逢狹路間行、亦た曰く「長安有狹斜一行」とあつて、ともに富貴の家庭の平和なる有様を寫して居る。その相逢狹路間と題するは、

相逢狹路間。道隘不容車。不知何年少。夾轂問君家。君家誠易知。易知復難忘。黃金爲君門。白玉爲君堂。堂上置樽酒。作使部郎倡。中庭生桂樹。華燈何煌煌。兄弟兩三人。中子爲侍郎。五日一來歸。道上自生光。黃金絡馬頭。觀者盈道傍。入門時左顧。但見雙鸞鴛。鸞鴛七十。羅列自成行。音聲何嘈囂。鶴鳴東西廂。大婦織綺羅。中婦織流黃。小婦無所爲。挾瑟上高堂。丈人且安坐。調絳方未央。その長安有狹斜一行と題するは、

長安有狹斜。狹斜不容車。適逢兩少年。挾轂問君家。君家新市傍。易知復難忘。大子二千石。

中子孝廉郎。小子無官職。衣冠仕洛陽。三子俱入室。室中自生光。大婦織綺羅。中婦織流黃。小婦無所爲。挾瑟上高堂。丈夫且徐徐。調絳詎未央。

この二詩は、極めて相類似し、その辭句に至りても全然同一の句があるので、或は先に相逢狹路間の方が出て、後に之を節略して長安有狹斜としたのでは無からうかと思はれる。但し、その紆餘曲折の妙を極めたのは、相逢狹路間であつて、長安有狹斜の方は、精彩に乏しき憾がある。青邱の此作は、矢張、長安有狹斜に擬したので、句數までも同じである。なほ樂府題解に「晉の陸機の長安狹斜行に云ふ、伊洛有歧路、歧路交朱輪」と、すなはち世路險狹邪僻、正直の士、手足を措くところなきをいふ。唐の李賀に難忘曲あり、亦た此に出づ」とあつて、後には、この題の原始的意義を離れて、この構想を試みる様に成つたのである。

【詩意】長安に狹い小路があつて、わづかに車騎を容るるばかり。路に兩個の俠少年に逢つたが、馬を廻して、君の邸は何處だといつて問うた。君の邸は、渭橋の西に當り、まことに分かり易く、決して迷ふ様なことはなく、その結構からして、すでに素張らしい。それから、君の家の長子は、至尊に温室殿に侍し、次子は、籍を金馬門に置いて、宮禁に奉仕して居るし、少子は、皇城警衛の任に當り、その光彩、上の二兄と均しく、三人ながら、打ちも揃つて、立派な身分である。その三子が家に歸つて來る其度ごとに、各車騎を擁して、狹い小路が雜沓する位、そして、長子の婦は、琵琶を弾じ、

中子の妻は、前溪の曲を舞ひ、末子の妻は、杯酒を勧めつつ、白銅鞮を歌ふことが、極めて上手である。かくの如く、三夫婦、打ち揃つて、高堂の上で宴を催すことであるから、團樂の樂、たとふるに物もない位。三子の父君の喜、推して知るべしである。あはれ、丈人よ、遽に起つことなく、緩ツくりして居られるが善い。庭樹には、鳥の歸り栖むなく、まだ日暮には程もあるから、十分に、樂を極めることが出来やう。

【餘論】この首は、全く古詞を踏襲しただけであるが、古意古色、ともに及ばず、そして、どこいつて、新しい構想を著けた處もなく、忌憚なくいへば、淺俗凡近を免れぬものである。

雙桐生空井

雙桐空井に生ず

交生碧玉樹、竝覆黄金井。

交生す碧玉の樹、竝に覆ふ黄金の井。

根通夕潤深、葉帶朝光冷。

根は夕潤に通じて深く、葉は朝光を帯びて冷かなり。

應有感秋人、時來鑑愁影。

應に有るべし、秋を感ずるの人、時に來つて愁影を鑑す。

【字解】【一】交生、交は交節、枝を交へる。【二】黄金井、井欄等に黄金の鍍金がしてある。西征記に「太極殿上、金井、金博山、龍輦あり。交龍、山を井上に負ふ、金獅子あり、龍の下に在り」と見ゆ。

【題義】雙桐生空井は、樂苑に「相和歌辭平調曲」とあつて、もと猛虎行から出たのである。魏の明帝の猛虎行に、雙桐生空井、枝葉自相加、通泉溉其根、玄雨潤其柯とある。これは、無論、篇中の一解であつて、王僧虔の技録に「荀餘載するところ、雙桐の一篇、今傳はらず」とある通り、その全篇が散佚したから、猛虎行として、旨意の究極するところも判じ兼ねるが、この四句は、全く井上の雙桐を詠じたものである。そこで、この四句の意を取つて之を演じ、桐生空井と題して、別に一首としたものがあつて、その古詞は、

季月對桐井。新枝雜舊株。晚葉藏栖鳳。朝花拂曙鳥。還看稚子照。銀牀擊轆轤。

といひ、後人の作は、あまり見えぬが、青邱の此作も、矢張り、その意を承けたのである。

【詩意】葉は碧玉と見まがふ梧桐の樹が、兩株枝を交へて列立し、その下なる黄金の井を覆うて居る。もともと井戸に接近して居るから、桐の根は、夕に地下濕潤の氣を受け、桐の葉は、朝に井水に映つる曙光を帯びて、極めて涼しげに見える。しかし、處から、秋の衰れを感ずる人は、時たま、この桐樹の邊に來り、そして井水に臨んで、愁を含んだ其姿を照らし見ることであらう。

【餘論】根通の二句は、桐が金井に接近したることを道うて、題義を全うし、應有感秋人の二句は、桐と井とを合せ、且つ一步を拓開したのである。

征婦怨

征婦怨

良人不願封侯印。

良人は願はず、封侯の印、

虎符遠發當番陣。

虎符遠く發す當番の陣。

幾夜春閨惡夢多。

幾夜か春閨、惡夢多し、

竟得將軍軍覆信。

竟に得たり將軍軍覆るの信。

身沒猶存舊戰衣。

身沒して、猶ほ存す舊戰衣、

東家火伴爲收歸。

東家の火伴、爲に收めて歸る。

妾生不識邊庭路。

妾生まれて識らず、邊庭の路、

尋骨何由到武威。

骨を尋ね、何に由つてか武威に到らむ。

紙幡剪得招魂去。

紙幡剪り得て、魂を招いて去る、

只向當時送行處。

只だ向ふ、當時送行の處。

く」とある。【一】紙幡、紙の旗。紙を剪つて魂を招くといふのが、唐代の風俗で、ここでは取り敢へず、靈前に建てた紙旗の紙を剪つたのであらう。

【字解】【一】良人、わが夫を指して云ふ。【二】虎符、後漢書杜詩傳に「舊制、兵を發するに、皆虎符を以てす。符策合會、取つて大信と爲す」とあつて、兵を發する時の割符には虎を畫いて居る。【三】當番、舊唐書職官志に「凡そ散官當番上下」とあり、金史兵志に「西北邊、分番屯戍軍あり」と見ゆ。【四】惡夢、緣起の惡い夢。【五】軍覆信、全軍覆滅したといふ便り。【六】火伴、木蘭詩に出門看火伴、火伴始驚惶とある。火は夥と通ず、なか間。【七】武威、漢書地理志に「武威郡武威縣、故の休屠王の地、武帝の太初四年開

【題義】征婦怨といふ題は、漢魏六朝の間には無く、樂府遺聲に「怨思曲」とあり、樂府詩集に「新樂府雜題」とある通り、唐になつて、はじめて見えた。その中、孟郊の四首は、五言の短篇であるが、張籍のは七言八句である。

九月匈奴殺邊將。漢軍全歿遼水上。萬里無人收白骨。家家城下招魂葬。婦人依倚子與夫。同居貧賤心亦舒。夫死戰場子存。妾身雖存如畫燭。

青邱の此作は、張籍を學び、いささか句數を増し、且つ新意を出して、その雷同を避けたのである。【詩意】わが夫は、何も印綬を賜はつて封侯になりたいといふ志望も無かつたが、虎符を以て當番の兵士に徵集せられたから、私に別れて、萬里遠征の途に上つたのである。すると、春の夜の闇の中、幾度か續いて、しきりに惡い夢を見たので、萬一の事が無ければ善いがと、ひそかに案じて居た處が、案の定、將軍深く胡地に入り、不幸にして、戦、利あらず、全軍爲に覆没をしたといふ悲しい報知を得た。わが夫も、無論、死んで仕舞ひ、あとに残したのは、著古した戰袍だけで、東家の仲間には、親切にも、これを取り收めて歸つて來た。私は、もとより女の身で、生まれてから、邊庭の路を知らな

れ、婢は燈火を指し上げて持つて来た。この時、少婦は耳に明璫を懸け、腰に環珮を結び、晚妝略ぼ成れるに因つて、漢江の邊に出かけて、游冶郎を迎へむとして居る。眺めやれば、水は淀んで静に流れ、花は夜色を帯びて冷かに、そして、月はほのかに明るい。しくものもなき臘夜の景色にあくがれて、舟中でも、樓上でも、鬪歌の聲がかけ合ふ様に聞こえる。年年、この頃、大隄の路は、人の腸を断つばかり、倡情冶思、自ら勝へず、そこで、南客が立ち去れば、北商が入れ替つて来て、すこしも客の絶え間が無い位賑はしい。

【餘論】前半四句は、襄陽の少女を寫し、後半四句は、大隄の風物を描き出したが、芳芬悱惻の趣に於ては、なほ稍や足らざるの憾がある。

飲酒樂

飲酒樂

七絃五絃角奏、
一觴兩觴羽行、
且樂眼中人聚、
莫憂頭上天傾。

【字解】一、七絃五絃、琴の種類。琴はもと十三絃であるが、かういふ数の絃を張つたものもある。二、角奏、清角の曲を奏する。韓非子に「師子、琴を授つて之を鼓して曰く、清角に如かずと。一たび奏すれば、

雲、四北方より来り、再び奏すれば大風雨」とあり、博物志に「清角は黄帝の琴」とある。三、一觴兩觴、觴は杯。四、羽行、羽觴といふ語から點化したので、鳥羽の如く速に行る。演繁露に「諸家、羽觴を釋すること、同じからず、唯だ李善、漢書音義を引いて、生僻の形を作すといふもの、是れなり。孟康、亦た曰く、羽觴は生僻形を作し、頭尾羽翼あり」と見ゆ。五、眼中人、杜甫の詩に眼中之人吾老矣とある。わが眼中に在つて、一段の敬意を拂つて居る人。六、天傾、列子に「杞國の人、天の墜つれば身寄るところなきを憂へ、寢食を廢す」とある、取り越し苦勞、いらぬ心配をする。

【題義】飲酒樂は、樂苑に「雜曲歌辭、清商曲」とあつて、題名の通り、飲酒の樂みを敍したのである。

【詩意】七絃五絃の琴を以て、清角を奏せしめ、一杯二杯、杯は鳥の羽の如く、席上を巡つて居る。唯だ眼中に在る然るべき人人と會飲すれば、まことに愉快の極、頭上の天が傾き墜ちはしまいかなどいふ、取り越し苦勞はせぬが善い。

【餘論】簡警切當ではあるが、いささか物足らぬ感じがするので、今少し厥辭を放つて、作者平生の伎倆を發揮して呉れたらと、折角の好題目に對して、いささか遺憾である。

鳳臺曲

鳳臺の曲

飛裙織霧秋痕薄、
飛裙霧を織つて秋痕薄く、

樂府 飲酒樂 鳳臺曲

【字解】一、飛裙、風に吹かれ

星漢低宮花漠漠。星漢、宮に低れて花漠漠。
 瓊臺夜寒閉羸女。瓊臺夜寒くして羸女を閉し、
 鵝管參差隔煙語。鵝管參差、煙を隔てて語る。
 瑤京舊侶招遠游。瑤京の舊侶、招いて遠游、
 人間帳冷鴛鴦愁。人間帳冷かにして鴛鴦愁ふ。
 海影無塵月如夢。海影塵なく、月、夢の如し、
 仙骨不欺鸞背重。仙骨、鸞背を欺いて重からず。
 衰蘭泣露空秦苑。衰蘭露に泣いて秦苑空しく、
 叢玉聲微彩霞遠。叢玉聲は微にして、彩霞遠し。

る。【一】星漢、銀河、即ち天河。【二】漠漠、ほの暗き貌。【三】羸女、立派な高臺。【四】羸女、秦の穆公の女弄玉をいふ、詩の秦風の注に「秦は、初め、伯益禹を佐け、水を保めて功あり。姓を羸氏と賜ふ」とある。【五】鵝管參差、李賀の詩に、王氏吹笙鵝管長とある。鵝管とは、鵝の羽管ほどの管、簫の各管をいふ。參差は、長短齊しからざるの貌。金縢の注には、楚辭の望夫君二兮未來、吹參差兮誰思を引き、參差は洞簫としてあるが、洞簫は、この場合に全然關係がない。

【七】瑤京、天上の都。【八】舊侶、むかしの仲間。【九】不欺鸞背重、鸞背を壓倒して重からしめることではない。體の極めて輕きをいふ。【一〇】秦苑、秦宮の苑圃。【一一】叢玉、簫をいふ、陳暘の樂書に「簫の器たる、竹を編んで成るものなり、故に叢玉と稱す」とある。

【題義】 鳳臺曲は、上雲樂の一で、古今樂錄に、「上雲樂七曲、梁の武帝製して、以て西曲に代ふ。」

に曰く鳳臺曲、二に曰く桐柏曲、三に曰く方丈曲、四に曰く方諸曲、五に曰く玉龜曲、六は曰く金丹曲、七に曰く金陵曲」とあつて、樂府詩集に據れば、清商曲に屬して居る。鳳臺曲の古詞は、

鳳臺上。兩悠悠。雲之際。神光朝三極。華蓋過延州。羽衣昱耀。春吹去復留。

といふので、鳳臺を點出してあるが、純ら吹笙の事を云つたのである。しかし、王無兢・李白の作は、鳳臺に關係ある蕭史・弄玉の事を主として詠出して居る。列仙傳に「蕭史は、秦の穆公の時の人、善く簫を吹いて、能く孔雀白鶴を致す。穆公の女弄玉、これを好す。公、妻はす。乃ち弄玉に教へて、鳳臺を作らしめ、一旦、夫婦同じく鳳に隨つて去る」とあり、一統志に「鳳女臺の址は、寶雞縣に在り」と見えて居る。青邱の此作も、矢張、蕭史弄玉登仙の事を敍したのである。なほ、鳳凰曲・蕭史曲なども、鳳臺曲と類似したものである。

【詩意】 風に吹かるる衣の裾は、さながら霧を織つた様で、秋を帯びて稍や涼しく、銀河は天を横ぎつて、斜に宮闕の上に垂れかかり、花は漠漠として、ほの暗く、物とはなしに凄寥の趣がある。この時しも、羸家の女たる弄玉は、瓊臺の中に獨坐して、長き夜を明かし兼ねて居ると、參差たる鵝管を吹きすさぶ聲が、煙を隔てて聞こえ、ここに、初めて蕭史と相知るやうになつた。二人とも、もとは上界の神仙、何かの事の爲に、此世に謫せられたものと見え、瑤宮なる仙人仲間が、もう還つて來いといつて、頻りに招いた爲に、再び遠遊して、やがて天宮に向ふことになつたが、昨日、人間の契を

思へば、故帳冷にして兩個の鴛鴦、まことに愁に堪へぬばかり。眺めやれば、萬里の滄溟、晴れ渡つて塵だになく、いざよふ月は、ほのかにして夢の如くである。この時、二人は、鸞鳳の背に乗つて、天空を横絶したが、體軀すでに軽くして、まことに、相應しげに見える。下界に於ては、秦苑の中、凋みかかつた蘭花が、露を帯びて、さながら愁ふるが如く、やがて、簫聲次第に微になつて、二人の影は、遠く彩霞の中に没して仕舞つた。

【餘論】起四句は、二人歡會の事由、瑤京の二句は、再び天上に歸る様に成つたことを敘し、海影の四句は、即ち登仙の有様を描き出したので、標紗孤詣、筆筆仙氣を帯びて居る。

美女篇

美女篇

美女婉清揚。白皙纖且長。
艷色照上國。不殊古姬姜。
巧笑發令姿。芳詞吐柔腸。
耀首有何物。黃金作釵梁。
珥懸礫。珂珠禕帶藿蒔香。

美女、婉として清揚、白皙、纖にして且つ長し。
艷色、上國を照らし、古しへの姬姜に殊ならず。
巧笑、令姿を發し、芳詞、柔腸を吐く。
首を耀かす、何物かある、黃金、釵梁と作す。
珥には懸く礫、珂の珠、禕には帯ぶ藿蒔の香。

新服製羅紈。光輝麗青陽。
上袂繡蛺蝶。下裙織鴛鴦。
姍姍步春風。乍見驚欲翔。
雖有楚大夫。善賦焉能詳。
豈徒聘妍媚。況乃持貞良。
家居闢高門。宛在城中央。
過者共傾慕。日晏停上襄。
借問誰氏子。無非金與張。
蹇修豈不勤。通辭重珪璋。
中懷非所託。雁幣徒相將。
永宵歎遲回。起倚東西廂。
君子苟未得。年徂諒何傷。

新服、羅紈を製し、光輝、青陽よりも麗なり。
上袂に蛺蝶を繡し、下裙に鴛鴦を織る。
姍姍として春風に歩し、乍ち見れば驚いて翔らむと欲す。
楚の大夫ありと雖も、善賦、焉んぞ能く詳にせむ。
豈に徒だ妍媚を聘するのみならむ、況んや乃ち貞良を持。
家居、高門を闢き、宛として城の中央に在り。「するをや、
過ぐるものは、共に傾慕、日晏くして上襄を停む。
借問す、誰氏の子、金と張とに非ざるはなし。
蹇修、豈に勤めざらむや、通辭、珪璋よりも重し。
中懷、託するところに非ざれば、雁幣、徒に相將のるのみ。
永宵、遲回を歎じ、起つて倚る東西の廂。
君子、苟くも未だ得ず、年徂いて、諒に何ぞ傷まむ。

【字解】【一】清揚、容貌美にして氣揚がる貌。【二】白皙、色の白きこと。【三】纖且長、肥えずして丈長きこと。【四】上國、

など、その車馬を停めて、じつと見入つて居る位。この美女は、本来どこの家の娘さんかといへば、金張に比すべき名族であつて、その門地は、もとより卑賤ではない。されば、媒妁の役を務めるものは、辭理を通じて、珪璋よりも貴い様に言ひ觸らして、必ず高貴の人に配する様にしたいと、精骨を折つて居るが、美女の身になると、苟くも、おのが中心を託するに足る様な人でなければ、雁の贄も役に立たず、その儘、お流れとなつて仕舞ふのである。かくの如く、徳容門地、何一つとして缺く處もないのに、容易に然るべき配偶者を得ぬ處から、秋の夜長に、その不運を歎き侘びて遅回し、起つて、東西廂に倚り、心も落ち付かず、その身を持って餘まして居る様な次第。君子も、矢張、その通りで、苟くも其心に得て、これならと思ふ様な明君でなければ、決して、出でて仕へず、たとひ、歲月しきりに移るとも、決して自ら悲傷せず居る。

【餘論】起首六句は美女の姿容態度、耀首の八句は服飾衣裳、姍姍の六句は其才徳、家居の六句は其地望、かなり細かに列敘してある。寒修の六句は、未だ其耦を得ざるをいひ、結二句は、翻つて、君子の身上に至り、全篇諷諭の旨も、ここに至つて、はじめて明白である。

將軍行

將軍結髮從鞍馬。

將軍結髮して、鞍馬に従ひ、

將軍行

【字解】結髮、髮を結び上げる。即ち元服する、史記李將軍傳に「臣

新領前軍號橫野。

新に前軍を領して、橫野と號す。

面謾不數屠狗兒。

面謾、數へず屠狗の兒、

負勇曾擒射鵬者。

勇を負うて、かつて擒にす射鵬の者。

狼星掃天芒角斜。

狼星、天を掃うて、芒角斜なり、

大旗獵獵吹風沙。

大旗、獵獵として、風沙を吹く。

黃金傾盡養部曲。

黃金、傾け盡して、部曲を養ひ、

匈奴未滅何爲家。

匈奴、未だ滅びず、何ぞ家を爲さむ。

前日賢王五千騎。

前日、賢王の五千騎、

直入朝那殺邊吏。

直に朝那に入つて邊吏を殺す。

天子初聞怒赫然。

天子、初めて聞いて怒る赫然、

出師誓奪河南地。

師を出して誓つて奪はむとす河南の地。

五營材官元自多。

五營の材官、元と自ら多し、

詔書未須徵七科。

詔書、未だ七科を徵するを須ひず。

結髮して、匈奴と戦ふ。今乃ち一たび單子に當るを得たり」とある。
 【一】領前軍、先陣を部下とする。
 【二】橫野、將軍の號、後漢書王常傳に「即ち營を拜して橫野將軍となし、位次、諸將と席を絶つ」とある。
 【三】面謾、面前に於て譏罵する。
 【四】屠狗兒、史記淮陰侯傳に「信、かつて樊將軍を過ぐ、門を出でて笑つて曰く、生きては乃ち噲等と伍を爲す」とあり、又樊噲傳に「噲、屠狗を以て事と爲す」とあり。
 【五】負勇、勇氣を自負する。
 【六】射鵬者、史記李將軍傳に「匈奴三人、射て中貴人を傷つく。廣曰く、是れ必ず鵬を射るものならむ」と。乃ち三人に馳す。三人馬を亡うて歩行す。行くこと數十里、廣、身自ら二人を射殺し、生きながら一人を得たり、果し

己御明堂推畫轂。すでに明堂に御して、畫轂を推し、

還開武庫授雕戈。還た武庫を開いて雕戈を授く。

灞陵原頭軍晚發。灞陵原頭、軍、晩に發し、

北出雲中與高關。北に出づ、雲中と高關と。

單于一夜六驃逃。單于一夜、六驃逃れ、

大漠無人唯漢月。大漠人なく、唯だ漢月。

塞下從此烽火稀。塞下、これより烽火稀なり、

朝臣共賀震皇威。朝臣、共に賀す皇威を震ふを。

人生寧似功成樂。人生寧ろ功成るの樂に似むや、

白日長安鼓吹歸。白日長安、鼓吹して歸る。

將軍軍を領す、皆部曲あり。大將軍は營五部、部ごとに校尉一人、部下に曲あり、曲に軍候一人あり」と見ゆ。【三】匈奴未滅何爲家。史記霍去病傳に「天子、爲に第を治す、驃騎をして之を觀せしむ、對へて曰く、匈奴、未だ滅びず、家を以て爲すなきなり」と。上、益す重んじて之を愛す」とある。【二】賢王。匈奴單于の下に居て左右大臣の如きもの、史記匈奴傳に「冒頓に至つて、匈奴最も強大、左右賢王を置く」とある。【三】朝那。地名、一統志に「今の平涼府平涼縣は、漢の安定郡朝那縣、府城の東に朝那城あり」と見ゆ。【六】河南地。支那内地の河南ではなく、塞外なる黄河以南の地、漢書に「秦の始皇、六國を滅し、蒙恬をして胡を撃たしめ、悉く河南の地を收め、河に因つて塞を爲し、騎戍を徙して以て之に充つ」とある。【七】五營。上の部曲の條に見ゆ。大將軍に隸屬する五部の營兵。【八】材官。漢書に「材官、驍強」とあつて、その注に「武技の臣」とある。【九】徵七科。人民中、七種類の者を兵士として徵集する、漢書武帝本紀に「天漢四年、春、天下の七科の騎を發す」とあつて、その注に「吏の罪ある一、亡命二、賢者三、賈人四、故と市籍ある五、父母、市籍ある六、大父母、市籍ある七」とある。【一〇】明堂。天子の諸侯を會する處。【一一】推畫轂。天子、自ら將軍の車轂を推して之を出征せしむること、漢書馮唐傳に「臣聞く、上古、王者の將を遣すや、跪いて轂を推して曰く、圖より内は、寡人、これを制せむ、圖より外は將軍之を制せよ」とあり、隋書禮儀志に「諸侯及び夫人、命夫、命婦の輅、畫轂、牙、軾、虞文を以てす」とある。畫轂の轂は車軸の先端、畫は之を雕飾したること。【一二】開武庫。武器庫を開く、晉書馬隆傳に「武帝の時、涼州刺史楊欣、羌戎の和を失ふ。帝、馬隆を以て武威太守となし、勇士三千人を募り、隆が自ら武庫に至りて仗を運び、三年の軍資を給するを聽るす」とある。【一三】雕戈。飾のある矛、國語に「晉の惠公、韓簡をして戦を挑ましむ。穆公、雕戈を衝へ、出でて使者を見て曰く、寡人、將に身もて見えむとす」とある。【一四】灞陵。金縢注には、一統志に「灞水は、西安府城の東に在り」とあるを引いてあるが、切實でない。灞陵は、勿論、灞水の近傍であるが、漢の文帝の陵の名。【一五】雲中與高關。史記衛青傳に「車騎將軍青をして雲中に出でしめ、以て、西、高關に至り、遂に河南の地を略す」とあり、後漢書明帝紀の注に「高關は山名、因つて以て塞に名づく、朔方の北に在り」とあり、班固の燕然山銘に「凌高關、下鍾鹿」とある。【一六】單于一夜六驃逃。單于が夜六頭の驃馬を驅つて逃げ出したといふこと。史記霍去病傳に「元狩四年、大將軍、武剛車をもつて自ら環つて營を爲さしめ、而して、五千騎を縱つて、往いて匈奴に當らしむ。匈奴、亦た萬騎ばかりを縱つ、會ま日、且さに暮れむとし、大風起り、砂磧面を擊ち、兩軍相見えず、單于遂に六驃に乗じ、壯騎數百ばかり、直に漢の圍を衝いて西北に馳せ去る」とある。【一七】大漠。今の戈壁沙漠。【一八】震皇威。皇威遠く胡地に震ふ。【一九】鼓吹。鼓を率ち笛を吹く、軍樂を爲すこと、後漢書班超傳に「八年、超を拜して將兵長史となし、鼓吹、輿を假す」とあり、岑參の凱歌に「鳴笳、鼓吹、軍行」とある。

【題義】將軍行は、樂府遺聲に「征戍曲」とあり、樂府詩集に「新樂府雜題」とあつて、唐代に初めて出來た樂府題。題名の示す通り、將軍が征戍して功勳を建てる次第を敘したので、作者の本意は、外征の際、かくありたしといふ理想を現はしたのであらう。

【詩意】將軍は、その昔、はじめて元服した少年の頃より、鞍馬に従つて外征を事として居て、頃は、先鋒の兵士を預つて、横野將軍の號を賜はつた。將軍の人となり、もとより豪爽、面前に於て邊罵し、屠狗の様な出身の賤しいものは物の數ともせず、又勇氣を自負して、匈奴の鵠を射るものを擒にしたこともある。今しも、天狼の星、斜に長い尾を引いて、その光芒、大空を掃ふばかり、變亂の兆たることは、言ふまでもなく、大旗は颯颯として、風沙が之に吹きつける。そこで、將軍は、黄金を散じ盡して、部曲の士を養ひ、匈奴が滅亡せぬ内は、自分の家どころでは無いといふ決心である。聞けば、先頃、匈奴の左右賢王が五千騎を率ゐて、朝那城に攻め入つて、わが邊境の吏を殺害したとこのことで、天子、はじめて之を聞き召されると、赫然として怒を發し、直に出兵して、黄河以南の胡地を奪ひ取らむと心に誓はれた。目下、將軍部下の兵營に於ては、武技に達したもののどもが、もとより多く、特に詔書を發して、七科の新兵を徵發する必要もない。やがて、天子は、明堂に出御の上、將軍の乗れる車の畫轂を推して、園より以外の事は、一切任かせると仰せられ、又武器庫を開いて、見事な雕戈をさへ賜はつた。將軍の本陣は、灊陵附近の宿舍より、最後に出發し、路を分つて、北の

方、雲中高関の兩處より、胡地に撃つて出ると、匈奴の軍、大に敗れ、さしもの單于も、夜、六頭の騾馬を驅つて、あわただしく逃げ出すといふ始末。渺渺なる沙漠の上には、人の隻影だになく、唯だ漢家の月が、皎皎として照らすばかり。これより、塞下には、戰爭全く絶えて、烽火を打ち揚ぐることもなく、滿朝の臣僚は、皇威遠く絶域に震へることを慶賀した。この世に於て、何が楽しいといつて、思ひ通りに功成るといふ其樂に似るものなく、今しも、將軍は、白日の中、鼓吹の聲に導かれて、しづしづと長安に凱旋された。

【餘論】この詩は、將軍の出身より始めて塞外の多難、それから、將軍が詔を受けて出征するに及び、何の造作もなく、胡兵を追ひ捲くつて、やがて凱旋するといふことを、一應無難に言ひおほせてあるが、これを一概して、極めて平板で、波瀾曲折に乏しく、絶えて中心絶頂なく、その全體の結構は、斷じて其妙を極めて居らぬ、但し狼星掃天芒角斜の一解、單于一夜、人生事似の二句などは、さすがに巧妙で、作者の手腕の程も窺はれる。

長安道

長安の道

長樂鐘聲動平津樹色開。

長樂、鐘聲動き、平津、樹色開く。

中郎長戟衛丞相小車來。

中郎、長戟衛り、丞相、小車來る。

新成賜將第更築候神臺。誰念公車客空懷作賦才。

新に成る將に賜ふの第、更に築く候神の臺。誰か念はむ、公車の客、空しく賦を作るの才を懷かむとは。

【字解】【一】長樂 官名、三輔黃圖に「長樂宮は、本と秦の興樂宮なり。高帝、はじめ櫟陽に居り、七年、長樂宮成るや、徙つて長安城に居る」とある。【二】鐘聲 朝早く鐘が鳴り出す、岑參の詩に金闕曉鐘開萬戸とある。【三】平津 漢書公孫弘傳に「元朔中、丞相弘を封じて平津侯となす」とあつて、その注に「平津は、長安の地名」とある。【四】中郎長戟衛 文獻通考に「漢の武帝、はじめて期門を置く、元帝、更めて虎賁郎と名づけ、中郎將を置いて之を領せしめ、虎賁宿衛を主るとある。【五】丞相小車來 漢書車千秋傳に「車千秋、本姓は田氏、年老いて朝見するや、小車に乗じて殿に入るを得、因つて車丞相と號す」とある。【六】賜將第 上の將軍行の中にも注して置いたが、漢の武帝が驃騎將軍霍去病の爲に新邸を造られしこと、漢書の本傳に見ゆ。【七】候神臺 天上の神人の下降を迎へる爲に、特に築いた高臺。史記武帝紀に「公孫卿曰く、仙人、樓居を好むと。ここに于て、上、長安には費廉桂觀を作り、甘泉には益延壽觀を作らしめ、卿をして、具を設けて神人を候せしめ、乃ち通天臺を作り、銅具を其下に置く」とあり、三輔黃圖に「武帝、神明臺を造る、仙人を祭る處、上に銅人あり、掌を舒べて、銅盤玉杯を捧げ、以て雲表の露を受け、玉屑に和して以て之を服し、以て仙道を求む」とある。【八】公車客 後漢書丁鴻傳に「詔して、鴻を徵して至らしめ、御衣及び綬を賜うて、公車に稟食せしむ」とあつて、その注に「公車は署名、公車の在るところ、因つて以て名づく。諸の特詔の者、皆居て以て命を待つ、故に食を給せしむ」とある。又、王維の詩に名儒特詔滿公車とある。

【題義】長安道は、樂府正聲に「漢の鼓角橫吹曲」とある。帝都繁盛の狀を詠出するのが趣旨であるが、この作は、更に進んで、皇城の壯麗に就いて構想したのである。

【詩意】長樂宮中に於ては、曉早く鐘聲が鳴り響き、名だたる侯家のある平津の地に於ては、樹色が、はつきりと見える。虎賁中郎の面々は、長戟を執つて、皇城に宿衛し、年老いたる丞相は、特別の禮遇を受け、小車に乗つて入朝する。それから、天子が驃騎將軍に賜ふ爲に建てられた新邸は、やつと竣工し、更に神人を候する高臺を築かれた。太平の今日、土木の盛、かくの如く、長安の都も、一きは美美しくなつた。ここに、公車に稟食し、やがて採用を待つて居る者どもの中には、賦を作るべき麗才を持つて居るものがあるが、誰も、それと氣の付かぬは、どうしたことか。區區として、奢侈の粉飾を爲すよりも、先づかういふ才俊を、それぞれ登庸することが、今日の急務ではあるまいか。【餘論】詩の形式は、純然たる五律で、上の六句が長安の盛を極力描き出したから、結二句は、聊か諷諭の意を以て之を行き、自然に、抑揚の妙がある。

洛陽陌

洛陽の陌

九陌看春光紅塵起相接。白玉車中郎綠珠樓上妾。柳迷臨水影花映當壚頰。

九陌、春光を見る、紅塵、起つて相接す。白玉車中の郎、綠珠樓上の妾。柳は迷ふ水に臨むの影、花は映す壚に當るの頰。

日暮過銅駝相逢盡豪俠

【字解】(一) 九陌 陌は大道、三輔黃圖に「長安は八街九陌」とあるから、多分洛陽も同じだらうといふこと、尤も九は九、九陌は多くの大道と見る方が善いかも知れぬ。(二) 紅塵 車馬の塵、劉禹錫の詩に紫陌紅塵とあると同じく、厭ふべき意味ではない。(三) 白玉 晉書衛玠傳に「少時、羊車に洛陽の市に乘ず、見るもの以て玉人と爲す」とある。(四) 綠珠 前に將進酒の條に見ゆ、石崇の愛妾の名。(五) 當壚 前の當壚曲の條に見ゆ、當壚少女を略して云つたのである。(六) 銅駝 洛陽街衢の名、洛陽記に「洛陽に銅駝街あり、漢、銅駝三枚を鑄り、宮西の四會道に於て相對せしむ。俗諺に曰く、金馬門外集豪賢、銅駝陌上集少年」とある。(七) 豪俠 豪傑と游侠の士。

【題義】洛陽陌、陌、一に道に作る、樂府遺聲に「都邑曲」とあり、樂府正聲に「漢の鼓角橫吹曲」とある。前の長安道が長安の光景を述ぶるに對し、これは、主として、洛陽市中の狀況を敘したのである。

【詩意】洛陽の重なる大通りには、春光、すでに遍なく、車馬の塵は地を捲いて、ほんのりと赤く、町と町と相接して居る。車中に居る若殿は、その面、白玉の如く、樓上に倚る何家の愛妾は、古しへの綠珠かと疑ふばかり、いづれも、妾容の美を誇つて居る。柳の影は、水に浮んで、いづれが、それと見まがふばかり、花は當壚の少女の紅頬に映じて、一しほ風情ありげに見える。日暮に近く、銅駝街上を過ぐれば、相逢ふもの、豪俠の士に非ざるはなく、まことに、外では一寸見られぬ有様である。

る。

【餘論】前の長安道が純然たる五律であるに對して、これは仄韻八句で、聲律も些か諧和を缺く處があるし、中間四句の如きも、對仗精當ならず、兎に角、五古の一體である。

悲歌

悲歌

征途險巖人乏馬飢

征途險巖、人乏れ、馬飢う。

富老不如貧少

富老は貧少に如かず、

美游不如惡歸

美游は惡歸に如かず。

浮雲隨風零亂四野

浮雲風に隨ひ、四野に零亂す、

仰天悲歌泣數行下

天を仰いで悲歌すれば、泣數行下る。

【字解】(一) 征途 旅の路。(二) 險巖 險しくかどかどしきこと。(三) 富老 富貴にして年老いたること。(四) 貧少 貧賤にして年なほ若きこと。(五) 美游 美遊 旅の支度に不足なくして遊歴する。(六) 惡歸 失敗して歸郷する。(七) 零亂 地に垂れて亂れる。(八) 四野 野原一面。

【題義】悲歌は、樂苑に「雜曲歌辭」とあり、歌錄に「魏の明帝造る」とあり、題解に「陸機の遊客

芳春林、謝惠連の釋人感淑節、皆客游物に感ずるを言ひ、憂思して作るなり」とあつて、青邱の此作も、矢張り、客遊中の苦況を敍したものである。

【詩意】旅する路は險しく、かどかどしく、人は疲れ、馬は飢ゑ、到底、その苦に堪へない。おもへば、富貴にして老いたるは、貧賤にして年なほ少きに如かず、何不足なく遊歴するよりも、失敗して歸郷するが善く、いづれにしても、滅多に旅などには出ぬに限る。眺めやれば、浮雲風に隨ひ、野原一面に垂れて亂れ、物象黯澹、天を仰いで悲歌すれば、數行の涙が留めどなく、自然に流れ落ちる。

【餘論】通首凄寥の極、富老不_レ如_二貧少_一の二句は、閱歷中より得た至情の語に相違ないが、いささか、大丈夫の氣概を缺いて居る。但し李時選は「漢魏を數へず」といつて激賞した。

邯鄲郭公歌

邯鄲郭公の歌

郭公舞郭公舞。

郭公舞ふ、郭公舞ふ、

天子無愁亦無苦。

天子愁なく、亦た苦なし。

醉後君臣一笑看。

醉後、君臣、一笑して看る、

鄴宮長夜皦皦鼓。

鄴宮長夜、皦皦の鼓。

【字解】郭公、題義の條に注す。【二】天子無愁、北齊書後主紀に「斛律光、死する後、益々驕縱、盛に無愁の曲を爲り、帝、自ら胡琵琶を彈じて之を唱へ、侍して之に和

郭公郭公爾莫舞。

郭公郭公、爾、舞ふ莫れ。

不解平陽圍。

平陽の圍を解かず、

竟作長安虜。

竟に長安の虜となる。

高山摧爲一杯土。

高山、摧けて一杯の土となる。

するもの、百を以て數ふ。人間、これを無愁天子といふ」とある。【三】鄴宮、一統志に「鄴都は、今の彰德府、齊の神武、晉陽に據り、後黨立して、并せて鄴都に據る」とある。【四】不解平陽圍、平陽は、晉陽の間

邊ではなからうかといふことで、同じく、後主紀に「武平七年、周の武帝、晉州を圍む。十二月、帝、圍所に至り、城南に戰つて大に敗れ、軍を棄てて先づ還り、安徳王延宗等を留めて、晉陽を守らしむ。徳化元年庚申、帝、鄴に入る。辛酉、延宗、周師と晉陽に戰つて大に敗れ、周師に虜へらる」とある。【五】竟作長安虜、同じく後主紀に「帝、位を幼主恆に授けて、自ら太上皇となり、鄴より、先づ濟州に趨る。周師、漸く迫る。幼主、又鄴より東走す。太上皇、百餘騎を將ゐて、東走、河を渡り、太皇太后を濟州に留め、高阿那跋を遣して留守せしめ、太上皇、并に皇后、幼主を攜へて、青州に走り、將に陳に還らむとし、金甌を鞍後に置き、韓長鸞・淑妃等、十數騎と青州南鄆村に至り、周將尉遲綱に獲られ、ともに長安に送り、封じて温國公と爲す」とある。【六】高山摧爲一杯土、後主が後年死を賜はつたことを云つたので、同じく後主紀に「建徳七年に至り、宜州刺史穆提婆と反を謀るを誣ひられ、延宗數十人と、長幼となく、成な死を賜ひ、長安北原洪濱川に葬る」とある。一杯土は、一つかみの土で、漢書張釋之傳に「たとひ、愚民、長陵一杯の土を取ると、陛下何を以て其法を加へむや」とあるに本づく。

【題義】邯鄲郭公歌は、樂苑に「雜謠歌辭」とあり、その本詞は北齊人の作で、左の通りである。

邯鄲郭公九十九。技兩漸盡入三騰口。大兒緣高岡。雉子東南走。不信吾言一時。當看三歲在酒。樂府廣題に之を解釋して「北齊の後主高緯、雅に傀儡を好み、これを郭公といふ。時に、戲に郭公歌

を作る。將に敗れむとするに及び、果して、邯鄲に營す。高郭、聲、相近し。九十九は未數なり。鷹口は鄧林なり。大兒は周帝を謂ふ、太祖の子なり。高岡は後主の姓なり。雉は雞の類、後主の父武成の小字なり。後鄧林に敗る。盡く歌言の如し、蓋し語妖なり」とある。すると、この童謠の意味は「邯鄲に營して居る北齊の後主は、決して成功しない、やがて力盡きて、鄧林に入るであらう。周帝は、北齊の高氏を壓服し、後主は、東南に走るであらう。たとひ吾が言を信せずとも、酉の年になつたら、屹と思ひ當るであらう」といふので、それが、やがて、事實となつたのである。なほ陳後山詩話に「楊大年の傀儡の詩に云ふ、

鮑老當筵笑郭郎。笑他舞袖太郎當。若教鮑老當筵舞。轉要郎當舞袖長。

郭郎は、即ち郭公なり」とあつて、郭公は、轉じて郭郎となり、後世、戲場に其名を存して居たといふことが分かる。青邱の此詩は、矢張、この童謠の原意に沿襲して、いささか改作を試みたのである。

【詩意】郭公は舞ふ、郭公は舞ふ。舞を爲して、娛樂として居る天子は、もとより愁もなく、従つて、苦もなく、まことに、お目出た過ぎる。君臣、ともに酔後に於て、笑ひながら顔を見合せ、鄴都の宮中に於ては、夜もすがら、鼓聲鑿鑿として、しばらくも止む時がない。さはれ、郭公よ、郭公よ、今しも、天下多事の折から、決して舞などをして居てはならぬ。平陽の圍は解けずして、やがて、周師に陥れられ、はては、後主以下、残らず捕虜になつて、はるばる長安に連れて行かれ、山の高きを姓

とした北齊の君も、遂に死を賜はり、一杯の土に歸し、盡きの恨を併せて葬られて仕舞ふ様な始末、それにつけても、宴飲遊樂は、斷じて戒むべきことである。

【餘論】作者は、後代に生まれて、その以後の事實を知つて居るから、その構想は、自然周匝であつて、諷諭の意味も顯然として居る、但し、古意古色、兩つながら之を存し、含糊なる詞章の中に、其旨意を摸索するといふ趣は、自然相及ばぬ様である。

車遙遙

車遙遙

鷓鴣啼霜海城白。鷓鴣、霜に啼いて、海城白し。
 征夫趣裝牛上輓。征夫裝を趣し、牛は輓を上ぼす。
 天生兩轂轉長途。天、兩轂を生じて、長途に轉ず、
 那得令君不爲客。那んぞ君をして、客とならざらしむる
 出門已遠第一程。門を出でて、已に遠し第一程、
 耳中鳴鐸漸無聲。耳中の鳴鐸、漸く聲なし。
 房戶寧嗟寂寞守。房戶、寧ろ嗟せむや、寂寞として守るを、

樂府車遙遙

【字解】一、鷓鴣、司馬相如の上林賦に、鷓鴣、鷓鴣、鷓鴣とあつてその注に「鷓鴣は、鷓に似て黃白色、亦た圖に作る」とある。二、

征夫、旅ゆく人。三、趣裝、支度をする。四、牛上輓、輓は車の横木で、それに牛を縛りつけて、愈々出かける用意をする。五、兩轂、買鳥の時に碌碌復碌碌、百年雙轉轂とある。六、耳中鳴鐸、鐸は鈴、車に付けてある。今まで、耳に聞こ

山川唯念苦辛行。山川、唯だ念ふ、苦辛して行くを。
 欲車不行願車覆。車の行かざるを欲し車の覆るを願ふ、
 還愁損我車中玉。還た愁ふ、我が車中の玉を損するを。
 安得身如芳草多。安んぞ得む、身は芳草の如く多く、
 相隨千里車前綠。相隨うて千里車前に綠なるを。

えて居た鈴の聲。【七】苦辛行 離
 備して行く、李頎の詩に、嗟君未得
 志、猶作苦辛行とある。【八】車
 中玉 前に洛陽陌に白玉車中郎とあ
 つて、その處に注して置いたが、こ
 れは、衛玠の故事を暗用したのであ
 る。車中に居る玉の如き人、即ち吾
 が郎といふ意。

【題義】車遙遙は、樂府遺聲に「車馬曲」とあり、樂錄に「雜曲歌辭」とある。征人の車、遙遙とし
 て、次第に天涯に向ふ有様を目睹して、興を寄せたので、現存するものでは、唐の車斂の作が一番古
 く、即ち左の通りである。

車遙遙兮馬洋洋。追思君兮不可忘。君安游兮西入秦。願將微影隨君身。君在陰兮影不見。
 君仰三日月。妾所願。

青邱の此作も、無論、原意を承け、且つ幾分の新らしみを加へたのである。

【詩意】鴈雞は、霜に啼いて、さながら寒を警しむるが如く、海城一帯、そろそろ白んで、夜が明け
 かかった。この時しも、征人は支度を爲し、そして、車に牛をつけ、愈よ出發することになった。天
 は兩轂を以て轉ずる車てふ物を造り出して、長途を越えて行かしめるから、旅といふことが毎に在る

ので、車にして存在する上は、君をして、客となることを止めしむることが出来ない。君は門を出で
 て已に遠く、やがて第一の宿場にかかつたと見え、今まで聞こえて居た鈴も、次第に音がせぬ様に成
 つて仕舞つた。君去りし後、私が寂寞として、ひとり空閨の戸を守つて居ることは、もとより厭ひは
 せぬが、君が幾山川を越えて、難儀せらるることは、絶えず心にかかつて、忘れることは出来ない。
 いつそ、行けない様に車が顛覆して仕舞へば善いかと思ふが、さうすれば、ひよつと車中なる吾が郎
 の玉の顔に傷つけはせぬかと、それが又心配になる。そこで、どうかして、この身は芳草となり、ど
 こまでも、その端なく、千里相隨つて、車前に綠色をなし、絶えず、君に添うて居たいと思ふが、
 これも、亦た及びなき願望であらう。

【餘論】唐代諸家の作に比して、更に數歩を進めたもので、天生兩轂轉長途の二句は、車の存在
 を怨む意で、極めて面白く、房戶寧嗟寂寞守の二句は、その性情の正を見るべく、安得身如芳草多
 は、癡絶嬌絶、その没理窟の處が、まことに、兒女の語たるに相應しい。

楚妃歎

楚妃歎

章華臺前楚江水。
 月色墮煙鳥欲起。

章華臺前楚江の水。
 月色煙に墮ちて、鳥、起たむと欲す。

樂府楚妃歎

【字解】【一】章華臺 左傳に「楚
 子、章華の臺を成し、諸侯と之を落
 せむとす」とあつて、その注に「臺、

六宮不敢解羅衣。六宮敢て羅衣を解かず、

獵火照山君未歸。獵火山を照らして、君未だ歸らず。

【一】月色墮煙。殘月が曉煙の中に落ちる。【二】鳥欲起。宿つて居た鴉が飛び起きて啼き立てる。【三】六宮。周禮の天官に「内宰は、陰禮を以て六宮に教ふ」とあつて、その注に「後五前一、王者は后一宮、三夫人一宮、九嬪一宮、二十七婦一宮、八十一女御一宮、凡そ百二十人」とある。ここでは、唯だ奥御殿、御内儀と見れば宜しい。【四】獵火。李白の大獵賦に獵火燃兮千山紅とある通り、獵をするには、山を焼いて、禽獸を追ひ出すことが例になつて居る。

今、華容城内に在り」と見ゆ。楚子は、即ち楚の莊王。【二】楚江。揚子江、李白の詩、洞庭西望楚江分とある。

【題義】楚妃歎は、樂府正聲に「相和歌吟歎曲」とあり、樂府詩集に「謝希逸の琴論に、楚妃歎七拍あり、楚妃は樊姬なり」とある。その樊姬の事實は、劉向列女傳に詳しく「楚姬は、楚の莊王の夫人なり。莊王、狩獵畢弋を好む。樊姬、諫むれども止まず、乃ち禽獸の肉を食はず。王、かつて虞丘子と語り、以て賢となす。樊姬、これを笑ふ。王曰く、何を笑ふや。對へて曰く、虞丘子、賢なり、未だ忠ならざるなり。妾、後宮に充てらるること十一年にして、進むるところのもの九人、妾より賢なるもの二人、妾と同列のもの七人。虞丘子、楚に相として、薦むるところのもの、その子孫に非ざれば族昆弟、未だ賢を進め、不肖を退くるを聞かざるなり。妾の笑ふも、亦た宜ならずやと。王ここに於て、孫叔敖を以て令尹となし、楚を治むること、三年にして、莊王、以て霸たり」とある。そこで、楚妃歎は、主として、樊姬の事實を詠出したので、現存するものの中では、晉の石崇の四言が一番古

いが、樂府題解に「陸機の吳趨行に云ふ、楚妃且勿歎と、明かに近題に非ざるなり」とあつて、もつと早く此題を作つた人もあつたらうが、すでに散佚して仕舞つたのである。その七言は、唐人に始まつたので、張籍に左の一首がある。

湘雲初起江沈沈。君王遙在雲夢林。江南雨多旌旗暗。臺下朝朝春水深。章華殿前朝萬國。君心獨自終無極。楚兵滿地能逐禽。誰用一身繼筋力。西江若翻雲夢中。麋鹿死盡應還宮。

青邱の此作は、矢張、七言であるが、特に四句に限つたのである。なほ、楚妃吟・楚妃怨などいふのも、類題の題名で、二三その作がある。

【詩意】章華臺の前には、揚子江の流廣く、殘月が曉煙の中に落ちて、宿鴉は飛び起つて、啼き出さうとして居る。この時しも、樊姬は、獨り後宮に居て、夜もすがら、羅衣をも解くことなく、少しも眠らずして、君王の還御を待つて居るが、獵火は山を照らして、君王は、又しても例の御樂に耽つて居られる。かういふ始末では、國事憂ふべく、まことに、嘆息の至りである。

【餘論】この詩は、七言四句であるが、二句づつで韻が換つて居るから、絶句ではなく、六朝の樂府には、この體が頗る多い。全篇の趣旨は、楚王が狩獵に耽つて、國事を怠つて居ることを、樊姬が非常に嘆かしく思つて居る其情思を述べたので、まことに、諷諭の本旨に協つて居るし、月色墮煙の七字は殊に明瑩である。

神絃曲

神絃曲

秋燈畫壁熏煙埃。

秋燈畫壁、煙埃を熏し、

石馬汗流神下來。

石馬、汗流れて、神下り来る。

花衫娑娑絃切切。

花衫娑娑として絃切切、

旋風吹幡愁百結。

旋風、幡を吹いて愁百結。

雌狐學拜戴鬪體。

雌狐、拜を學んで、鬪體を戴き、

鬼箭射創血灑秋。

鬼箭、創を射て、血、秋に灑ぐ。

老鴉飛散巫嫗泣。

老鴉、飛び散じて、巫嫗泣き、

苦篁嘯雨溪幽幽。

苦篁、雨に嘯いて溪幽幽。

【字解】(一) 熏煙埃 燈火の油煙が燻る。(二) 石馬汗流 天寶遺

事に「潼關の戦、祿山の將崔乾祐、白旗軍を領して左右に馳突す。又黃

旗軍百餘を見る。官軍、ひそかに謂ふ、これ賊ならむと。敢て之に還らず。須臾にして、乾祐と戰ふを見、

黃旗軍勝たず。退いて又戰ふもの一ならず。俄にして、在るところを知らず。後、昭陵奏す、この日、靈宮

の前の石人馬、汗流る」とある。(三) 花衫 宋史儀衛志に「傳教幡、信幡

各二、幡を執る人、皆武弁、緋寶相、花衫勒帛」とあつて、花衫は傳令使の服裝である。(四) 娑娑 張衡の賦に「修初服之娑娑」

長余佩之娑娑」とあつて、さわさわと衣ずれの音のすること。(五) 絃切切 白居易の琵琶行に「小絃切切如私語」とある。(六) 旋風

つむじ風、李賀の神絃曲に「旋風吹馬馬踏雲」とある。(七) 雌狐學拜鬪體 狐談に「狐、夜、尾を擧げては火出づ。將に怪を爲さむ

とすれば、必ず鬪體を戴き、北斗を拜す。鬪體、墜ちざれば、化して人と爲る。詩に曰く、莫赤匪狐、莫黑匪烏と。今狐の在ると

ころ、烏 輒ち羣つて之を噪ぐ、蓋し皆妖祥の物」とある。(八) 鬼箭 鬼神の放つた箭。(九) 射創 創を射たのではなく、射中

各二、幡を執る人、皆武弁、緋寶相、花衫勒帛」とあつて、花衫は傳令使の服裝である。(四) 娑娑 張衡の賦に「修初服之娑娑」

長余佩之娑娑」とあつて、さわさわと衣ずれの音のすること。(五) 絃切切 白居易の琵琶行に「小絃切切如私語」とある。(六) 旋風

つむじ風、李賀の神絃曲に「旋風吹馬馬踏雲」とある。(七) 雌狐學拜鬪體 狐談に「狐、夜、尾を擧げては火出づ。將に怪を爲さむ

とすれば、必ず鬪體を戴き、北斗を拜す。鬪體、墜ちざれば、化して人と爲る。詩に曰く、莫赤匪狐、莫黑匪烏と。今狐の在ると

ころ、烏 輒ち羣つて之を噪ぐ、蓋し皆妖祥の物」とある。(八) 鬼箭 鬼神の放つた箭。(九) 射創 創を射たのではなく、射中

各二、幡を執る人、皆武弁、緋寶相、花衫勒帛」とあつて、花衫は傳令使の服裝である。(四) 娑娑 張衡の賦に「修初服之娑娑」

長余佩之娑娑」とあつて、さわさわと衣ずれの音のすること。(五) 絃切切 白居易の琵琶行に「小絃切切如私語」とある。(六) 旋風

つむじ風、李賀の神絃曲に「旋風吹馬馬踏雲」とある。(七) 雌狐學拜鬪體 狐談に「狐、夜、尾を擧げては火出づ。將に怪を爲さむ

とすれば、必ず鬪體を戴き、北斗を拜す。鬪體、墜ちざれば、化して人と爲る。詩に曰く、莫赤匪狐、莫黑匪烏と。今狐の在ると

ころ、烏 輒ち羣つて之を噪ぐ、蓋し皆妖祥の物」とある。(八) 鬼箭 鬼神の放つた箭。(九) 射創 創を射たのではなく、射中

各二、幡を執る人、皆武弁、緋寶相、花衫勒帛」とあつて、花衫は傳令使の服裝である。(四) 娑娑 張衡の賦に「修初服之娑娑」

長余佩之娑娑」とあつて、さわさわと衣ずれの音のすること。(五) 絃切切 白居易の琵琶行に「小絃切切如私語」とある。(六) 旋風

つむじ風、李賀の神絃曲に「旋風吹馬馬踏雲」とある。(七) 雌狐學拜鬪體 狐談に「狐、夜、尾を擧げては火出づ。將に怪を爲さむ

とすれば、必ず鬪體を戴き、北斗を拜す。鬪體、墜ちざれば、化して人と爲る。詩に曰く、莫赤匪狐、莫黑匪烏と。今狐の在ると

ころ、烏 輒ち羣つて之を噪ぐ、蓋し皆妖祥の物」とある。(八) 鬼箭 鬼神の放つた箭。(九) 射創 創を射たのではなく、射中

てた爲に創に爲つたのだが、詩語であるから、かういふ語法を用ひたのである。(一〇) 巫嫗泣 周禮に「女巫は、歳時の祓除登浴を掌る」とあり。國語に「男に在つては祝といひ、女に在つては巫といふ」とあつて、その注に「祝巫は鬼を見るもの」とある。巫嫗は、鬼を呼び下すことを業として居る。なほ此句の意は、金檀の按に「狐劍つき、鴉散じ、巫泣けば、神降つて、羣邪盡く斂まる」とある。(一一) 苦篁 篁は竹の叢を爲すもの、苦竹と同じ、節も無節の類。

【題義】神絃曲は、一に神絃歌といひ、樂府詩集に「清商吳聲歌曲」とあり、古今樂錄に「神絃十一曲、一に曰く宿阿、二に曰く道君、三に曰く聖郎、四に曰く嬌女、五に曰く白石郎、六に曰く清溪小

姑、七に曰く湖就姑、八に曰く姑恩、九に曰く採菱童、十に曰く明下童、十一に曰く同生」とある。

その命名の由來は、或は神の名に取り、或歌曲の内容から來たのもあるらしい。何にしても、神絃曲は、神靈を呼び下す時、絃聲に合はせて唱へる歌曲である。唐の李賀に神絃曲、神絃別曲などがある

が、青邱は、まさしく之に擬したのであるから、左に神絃曲だけを擧げて、參照に便することにしよう。

西山日沒東山昏。旋風吹馬馬踏雲。畫絃素壁聲淺繁。花裙綵縵步秋塵。桂葉刷風桂墜子。青狸

哭血寒狐死。古壁彩虬金帖尾。雨工騎入秋潭水。百年老鴉成木魅。笑聲碧火巢中起。

【詩意】秋の夜の燈火は、物古りたる畫壁を照らし、油煙がもやもやとして、頻に燻つて居る。時しも、石馬は汗を流して走り出し、そして、天上の神は、これに乗つて下界に降つて來られる。この間

傳令の役を奉仕する女巫は、麗しき花衫を着け、衣すれの音がざわざわとして聞こえ、歌に和する絃聲は、切切として咽ぶが如く、天地森肅の中、神の下降を導く旗は、旋風に吹き靡かされ、物とはなしに、愁思の百結するを覚える。雌狐は、人に化けやうとして、北斗を拜む真似を爲し、そして、御體を頭上に載せて踊つて居た處が、何處とも知らず、神箭が飛んで来て見事に命中し、狐は劍を帯び、その創口からは、血が颯と迸つて秋に注いだ。そこで、狐は化け終せず、その儘、どこかへ逃げて仕舞ひ、狐の居る處には、いつでも必ず居るといふ鳥どもは、驚いて飛び散じ、神おろしの役に當つた女巫の軀も、その靈驗に感じて、覺えず泣き出した位。かくて、妖邪すでに斂まりし後は、熊笹の雨を帯びて鳴る聲、さながら嘯くが如く、溪谷の中、幽幽として、唯だ凄氣が吹き動くのみである。

【餘論】この詩は、疑もなく、李賀を真似たので、字句さへも、いささか踏襲した痕跡がある。後半、即ち雌狐學拜戴、獨體の四句は凄寥の極、鬼氣紙に滿つるを覺ゆるばかり。これを前にして楊鐵崖、これを後にして徐青藤などに、一寸類似の者はあるが、その以外には、一寸見られないのである。

白紵詞二首

白紵の詞二首

白紵出自吳女工

白紵は、吳の女工より出づ、

著來色與素體同。著け來れば、色、素體と同じ。
 舞時偏向江渚宮。舞ふ時、偏に向ふ江渚の宮、
 長袖拂起微有風。長袖拂ひ起つて、微に風あり。
 觴催管促四座中。觴は催し、管は促す、四座の中、
 攬裾徘徊慘曲終。裾を攬つて徘徊し、曲の終るを慘む。
 玉階夜寒零露濃。玉階夜は寒くして零露濃かなり。

【字解】【一】白紵 題義の條に見ゆ、白い麻衣。【二】素體 白い肌。【三】江渚宮 一統志に「渚宮は、荊州府江陵縣に在り、楚の襄王建つ」とある。【四】觴催管促 管は笙笛の類、催促して酒を酌み、笙笛を吹く。【五】攬裾 もすそを巻ける。【六】慘 いたむ。

【題義】白紵詞は、樂府詩集に「舞曲歌辭」とある。宋書樂志に「白紵舞は、按ずるに、舞辭に巾袍の言あり、紵は本と吳地出づるところ、宜しく、これ吳舞なるべし。晉の俳歌に云ふ、皎皎白緒節、と。節は雙たり。吳音、緒を呼んで紵と爲す、疑ふらくは、白緒は即ち白紵ならむ」とあり。南齊書樂志に「白紵歌、周處の風土記に云ふ、吳の黃龍中の童謠に云ふ、行白者、君追汝句驪馬」と。後、孫權、公孫淵を征し、海に浮んで舶に乗す。白は舶なり。今の歌の和聲、猶ほ行白紵といふ」とあり。樂府題解に「古詞、盛に舞者の美を稱し、宜しく芳時に及んで樂を爲すべし、その白紵を譽むるに曰く、質如輕雲色如銀、製以爲袍餘作巾、袍以光軀巾拂塵」とあり。唐書樂志に「吳に在つては白紵たり、晉に在つては子夜たり、故に、梁の武帝、沈約をして其辭を改めしめて、子夜四時歌となす。

後の此曲を爲るもの、白紵ならば一曲、子夜ならば四曲、今中原、白紵曲あり、辭旨これと全く殊なり」とある。要するに、白紵は、舞の衣裳、舞を爲すことから、芳時行樂の意に及んだので、それが此題の原意である。その白紵舞歌といひ、白紵舞辭といひ、又白紵曲といひ、白紵歌といひ、白紵辭といひ、四時白紵歌といひ、いづれも、内容は同一である。就中、子夜と同じといふのは、聲調を主として云つたので、必ずしも、題の原意には關係せぬことと思ふ。

【詩意】白い麻衣は、吳地の女工が製作するので、これを著ると、その色は、さながら白い肌と同じである。やがて、舞を爲さむとして、渚宮に向つて往く。その長袖を拂つて起つときは、かすかながらに、風が動く。四座の人人、これを見て、頻りに興を催し、ひたすら催促をして、酒を酌み、笙笛を吹いて、之に和せしめる。それから、一曲將に終らむとし、裾を裏へ返して去りがてにして居ると、玉階夜寒くして、露は濃かに、涼氣ひたすら衣を透して身にしむを覺え、物とはなしに、痛ましげに見える。

【餘論】全篇七句、毎句に押韻してあるから、即ち柏梁體である。これは、舞女を寫しただけで、人心を搖蕩する様な趣はない。

出後閣臨前楹

舞衣皎皎潔且輕

飄如白雲向空行

迴腰流目君已傾

華燈吐燄欺月明

喧譁不聞遺珮聲

茱萸實紅蘭葉紫

千秋懽樂長如此

妾身得向君前死

後閣を出で、前楹に臨む、

舞衣皎皎として、潔く且つ輕し。

飄として、白雲の空に向つて行くが如く、

迴腰流目、君、すでに傾く。

華燈燄を吐いて、月明を欺き、

喧譁聞かず遺珮の聲。

茱萸の實は紅にして、蘭葉は紫なり。

千秋の懽樂、長く此の如くんば、

妾が身、君の前に向つて死するを得む。

【字解】

【一】後閣 家の後方なる閨房。【二】前楹 楹は柱。【三】皎皎 白く輝くさま。【四】飄 飄然として。【五】迴腰 腰をひれる。【六】流目 ながし目、秋波。【七】君已 傾は心を傾ける。【八】欺 欺は壓倒する。【九】喧譁 喝采の聲のかまびすしきこと。【一〇】遺珮 環佩を落す。【一一】茱萸 ぐみ、西京雜記に「戚夫人の侍兒買佩蘭實ふ、宮内、九月九日、茱萸を佩び、蓬餅を食し、菊花の酒を飲み、人をして長壽ならしむ」とある。

【詩意】後なる閨房より出でて、前なる柱に臨み、白紵の舞衣は、皎皎として白く輝き、まことに潔くして且つ輕げに見える。その舞を爲す様は、飄然として、白雲が空中に向つて飛行するが如くであるし、その腰をひねり、流し目をして、極めて風情ありげなるを見ると、君の心は、すでに傾いて仕舞ふ。その舞を爲す廣い堂宇の中に於ては、華燈煌煌として、燄を吐き、その鮮かなる光は、月明

をも壓倒せむばかり、堂中に於ては、喝采の聲、騒がしく、環佩の落ちた聲さへ分からね位。この舞を見ながら、茱萸の實の紅なるを佩び、蘭の葉の新に芽ぐんで紫なるを賞し、まことに、歡樂を極めて居られる。もし歡樂が千秋に亙つて長しへに此の如くであることが出来るならば、私は一身を捧げて、君の前で死にたいと思つて居ります。

【餘論】起首より喧譁不聞遺珮聲に至るまでは、矢張、舞態を寫し、茱萸實紅蘭葉紫の三句は、舞者が述べた壽詞であつて、歡樂長しへに存し、そして、おのれも終始君の前に居たいといふ意を逗露したのである。

阿那瓊

阿那瓊

牛羊草漫野大帳天山下。

牛羊草野に漫り、大帳天山の下。

十萬控弦兒聞狐齊上馬。

十萬控弦の兒、狐を聞いて、齊しく馬に上る。

【字解】【一】漫野 野に一ぱいにはびこる。【二】大帳 帳は穹廡、即ちテント。匈奴單子のは一番大きいから、特に大帳といつたのである。【三】天山 一統志に「哈密衛に天山あり、番人ここを過るとき、必ず馬を下つて拜す。一名雪山」とあり、又「土魯番に天山あり、一名祁連山」とある。塞外の高山。【四】控弦兒 弓を挽く兵士、漢書婁敬傳に「この時、冒頓單子、兵強く、控弦四十萬騎」とある。【五】聞狐 晉先置儀注に「狐は即ち始なり、應劭の幽州圖に騎あり、狐を執る。その始め、笛管を以てし、

後皆銅を以て器を作り、その聲、嚮來に似たり」とある。

【題義】阿那瓊は、樂府遺聲に「梵竺曲」とあり、樂府詩集に「雜曲歌辭」とある。その字義に就いては、北史に「阿那瓊は蠕蠕國王」とあり、通典に「蠕蠕は、拓跋の初より雲中に徙り、即ち種落あり、後魏の太武、神麁中強盛、盡く匈奴の故地を有す。阿那瓊は、孝明帝の時の蠕蠕國王、辭、匈奴の主と云ふなり」とある。すると、この題は、主として、匈奴の土俗を詠じたものである。

【詩意】牛羊の放たれた野には、一面に草が生ひ茂り、單子の本營たる大テントは、天山の麓に設けられてある。その單子の部下なる控弦の健兒は、凡そ十萬もあつて、一たび笛聲を聞けば、一齊に馬に騎して、戰爭に出かける用意をする。

【餘論】やや淺近を免れぬが、一種豪爽の姿致はある。吳明卿は之を評して、伉健といつた。

江南思

江南の思

妾本南國妹父母愛如珠。

妾は本と南國の妹、父母愛すること珠の如し。

貌豈慙明鏡身纔稱短襦。

貌、豈に明鏡に慙ぢむや、身、纔に短襦に稱ふ。

學成採蓮唱曉出橫塘上。

學び成す採蓮の唱、曉に橫塘の上に出づ。

舟小復身輕。隨風兩搖蕩。舟小にして、復た身輕く、風に隨つて兩つながら搖蕩。歸時曲岸傍。恰見貴遊郎。歸る時、曲岸の傍、恰も見る貴遊の郎。に堪へず。輟歌欲轉。權花淺不堪藏。歌を輟めて、權を轉せむと欲するも、花淺くして藏るる。將曠却成。晒相問那能隱。將に曠らむとして却つて晒を成す、相問ふ那ぞ能く隠れむ。雖憐郎意深。終嫌妾家近。郎の意の深きを憐むと雖も、終に嫌ふ妾が家の近きを。回首各盈盈。南湖月又生。首を回らせば各、盈盈、南湖月又生す。煙波三十里。都是斷腸情。煙波三十里、すべて是れ斷腸の情。

【字解】【一】南國妹。妹は詩經に、靜女其姝とあつて、眉目よしといふが本義、從つて麗人美婦をいふ。【二】貌豈顯明。鏡に映つても、決して自ら愧かしいと思はぬ程の美貌。【三】身雖稱短。權は腰までの短衣、その短衣が丁度似合ふといふので、丈高からず、從つて年の猶ほ若きないふ。【四】採蓮唱。採蓮歌に同じ。【五】橫塘。横に出でて居る隈。【六】兩搖蕩。舟と身と兩つながら搖り動く。【七】曲岸。彎入して居る汀岸。【八】貴遊郎。高貴にして遊行する少年。【九】各盈盈。情思の充滿せるをいふ。【一〇】南湖。湖南に同じ。

【題義】江南思は、樂府正聲に「相和歌辭相和曲」とあり、題解に「江南曲、古詞に云ふ、江南可採蓮、蓮葉何田田、蓋し、芳辰麗景、嬉游時を得たるを美するなり。梁の簡文、桂楫晚應旋は、唯だ游

戲を歌ふ。又采蓮采菱あり、皆ここに出づ。唐の陸龜蒙、又古辭を廣めて五解と爲すといふとある。つまり、江南の土俗を述べたので、就中、嬉游の一事は、殊に詩に入り易いから、多く此に道及して居る。この詩は、題下に注して「一に五首に作る」とあつて、四句づつ五首と見たものもあるが、四句毎に韻を換へた五古一篇と見る方が、至當である様に思はれる。

【詩意】私は、もと南方に生まれた少女、父母は、掌中の珠の如く愛でて大切に育てた。私の顔は、鏡に向つても愧かしくない程、身の丈は、やつと短衣に釣り合ふ位。この頃、採蓮の歌を覺えたから、曉早く蓮の花を采る爲に、横塘の邊に漕ぎ出したが、舟も小さいし、體も軽い處から、舟と體と、風に隨つて、兩つながら搖り動くを覺える程であつた。やがて、漕ぎかへして、彎入せる岸邊に來かると、岸上に貴公子の居るのを見て、物とはなしに羞かしく、歌ひかけて居た歌も止めて仕舞ひ、棹を轉じてよそに外さうと思つたが、あたりは、蓮の花も疎であつて、身を匿すことも出來ない。そこで、初めは、貴公子の不躰なるに對して、心に怒りかけむとしたが、いつとなしに、にこやかなる笑をなし、互に相問うて見れば、どうして隠し立てをしやうか、有りの儘に残らず話して仕舞つた。そこで、貴公子の眷戀の意、甚だ深きに對しては、しきりに同情を寄せ、さそふ水にいなむと思ふ位であるが、何分、私の家に近いから、うツかりした事をして、浮名を取つては大變だといふので、心ならずも差控へ、やがて、立ち別れて仕舞つた。互に振り向いて見て、盈盈たる情思に堪へず、去り

がてにして居ると、池の南に月が差し上り、煙波三十里、いづれの隈として、斷腸の思ならぬはな
く、さすがに心残りのされることである。

【餘論】可憐なる少女の情思を寫したので、層層遞下、極めて次第あつて、結構も緊密である。その
中、舟小復身輕の二句、輟歌欲轉權の二句は、新婉比なく、雖憐郎意深の二句は、なほ性情の
正を失はざるを見るべく、結末、煙波三十里の二句は、杳然として神遠きを覺え、餘韻長しへに盡き
ざる底の趣がある。

銅雀妓

銅雀の妓

鄴宮已罷幸歌舞尙如期

鄴宮、すでに幸を罷め、歌舞、尙ほ期の如し。

誰知看月夜却是望陵時

誰か知らむ、月を見るの夜、却つて是れ陵に望むの時。

薊澤銷羅薦松風吹總帷

薊澤、羅薦に銷え、松風、總帷を吹く。

妾身未得死寧當憂色衰

妾が身、未だ死するを得ず、寧ろ當に色の衰ふるを憂ふ

【字解】【一】鄴宮 鄴都に在つて漳水に臨み、銅雀臺も其中に在つて、舊と曹操が建てた。【二】罷幸 行幸が絶えて、曹操の
既に死せしを云ふ。【三】歌舞尙如期 題義の際に詳しく注して置く。曹操の遺言の通り、毎月一回、歌舞を爲すこと。【四】看月
夜 その一回は、十五夜なる故に云ふ。【五】薊澤 そら嶺の匂ひ、史記滑稽傳に「羅襦澗解け、嶺に薊澤を聞く」とある。【六】
羅薦 牀に敷いた羅、漢武内傳に「七月七日、乃ち宮掖を修飾し、坐を大殿に設け、紫羅を以て地に敷く」とある。【七】總帷 總
は細くて粗き布、それで造つた帳幕。位牌の前に挂けるので、題義の條に引ける曹操の遺命に見ゆ。

【題義】銅雀妓、一に銅雀臺に作る。樂苑に「相和歌辭平調曲」とあり、樂府題解に「舊說、魏の武
帝遺命して、諸子に令して曰く、吾が婕妤妓人、皆銅雀臺中に著け、臺上に於て、八尺の總帳を施し、
朝晡に舖繡の屬を上り、月ごとに十五に朝し、輒ち帳前に向つて伎樂を作さしめ、汝等、時時、銅雀
臺に登つて、吾が西陵の墓田を望めと。後人、その意を悲んで、これが詠を爲すなり」とある。する
と、この題は、曹操死後に於ける凄寥の狀況を敘して、亂世奸雄の跡を弔ふといふのが、その本旨
である。

【詩意】曹操、すでに逝き、鄴都宮中に於ては、行幸の事などは全く絶えはて、唯だ其遺命に依つて、
毎月一回、帳前に於て歌舞を爲し、決して、期を誤らない。その時は、いつでも、十五夜で、多くの
宮女は、月を看つて西陵の墓田を望んだであらう。臺上で、位牌の据ゑる處には、羅が鋪きつめ
てあるが、それも、空燒の匂いつしか消え失せ、松風は颯颯として、その前なる總帳を吹き、まことに
淋しき有様である。當日の宮女たりし私どもは、まだ死ぬことも出來ずして、御奉公をして居り、
年老いて色の衰へることなどは、少しも心配するに及ばぬが、なかなか果敢ないことである。

【餘論】これは、絶好題目であるのに、あまり見榮えのせぬのは、五律の體に拘束されたからであらう。それにつけても、題に因つて詩體を擇ぶといふことは、最も必要で、取りも直さず、作詩の第一義である。

猛虎行

猛虎行

陰風吹林鳥鵲悲。

陰風、林を吹いて、鳥鵲悲む、

猛虎欲出人先知。

猛虎、出でむと欲して、人先づ知る。

目光燿燿當路坐。

目光燿燿、路に當つて坐す、

將軍一見弧矢墮。

將軍一見して、弧矢墮つ。

幾家插棘高作門。

幾家か、棘を挿んで高く門と作し、

未到日沒收猪豚。

未だ日沒に到らざるに、猪豚を收む。

猛虎雖猛猶可喜。

猛虎、猛と雖も、猶喜ぶべし、

橫行只在深山裏。

橫行只だ深山の裏に在り。

【字解】

【一】陰風 夜を曇らす風。【二】燿燿 光り輝く貌。【三】將軍 李廣が虎だと思つて石に射中たといふことが史記の本傳にも見え、ここでは、それを暗用したのであらう。【四】弧矢墮 弧は弓、弓で矢を放つたといふこと。【五】插棘 棘を地に挿して虎の這入れの様にする。【六】猪豚 猪も亦た豚をいふ。

【題義】猛虎行は、樂府正聲に「相和歌辭平調曲」とあり、陸機の猛虎行の注に「雜言古猛虎行、飢不從猛虎食、暮不從野雀栖、野步安無集、游子爲誰驕。飢不從猛虎食は、但だ發首を取つて名となす、必ずしも、篇中の意義を以てせず。他、皆これに類す。此人にその志節を抗げ、義として、苟くも合はざるものを勸む」とあつて、猛虎行は、その古詞の起首に猛虎てふ字があつたから名づけたので、篇中の趣意には、何等の關係もない。李白の猛虎行も、亦た但だ猛虎を借りて興を起したのであるが、張籍・李賀に至りては、猛虎その物を詠じ、古詞とは大に異なつて來た。青邱の此作も、矢張、張李の眞似をしたに過ぎぬ。

【詩意】陰風颯颯として、林を揺り動かし、そこに宿せる鳥鵲などは、悲しげに啼き騒いで居る。風は虎に従ふといふ通りで、この風は、虎の爲めであるといふことは、人が先づ知つて居る。やがて、虎は、のそのそと林より出で來り、目光燿燿として、路にのさばつて坐して居ると、これを付け覗つて居た將軍は、一刻も猶豫ならず、直に弓に矢を番へて、ひゆうと射放つた。元來、この虎は數ば人里に出て來て害を爲すといふので、村中の人家では、いばらを地に挿んで門の如く高くし、そして、日の入り切らぬ内に、放し飼にしてある豕を片づけて仕舞はねばならぬ。さはれ、猛虎は、いくら猛惡であつても、深山の中に限つて橫行して居るから、まだ始末が善いので、人間には、これにも増して恐ろしいものが、白晝に跳梁して居る。

【餘論】結末二句は諷諭の本旨で「苛政は虎よりも暴なり」といふ古語を豫想して作つたものと見え、容易に人の摸索に堪へる。

湘中絃

湘中絃

涼風嫋嫋月粼粼。涼風嫋嫋として月粼粼たり、

竹色蘭香秋水濱。竹色蘭香、秋水の濱。

一夜猿聲流淚盡。一夜、猿聲、涙を流して盡く、

黃陵祠下泊舟人。黃陵祠下、舟を泊するの人の。

爲秋月聽猿聲とあつて、湘江の附近には猿が居る。【一】黃陵祠 一統志に「黃陵祠は、岳州瀟湘の尾、洞庭の口に在り、前代これを立て、以て舜の二妃を祀るもの、唐の韓愈に碑あり」と見ゆ。

【題義】湘中絃は、樂府詩集に「新樂府雜題」とある。湘靈が瑟を鼓するといふことは、著名の故事で、湘中絃は、即ち其瑟に合はせる歌といふ意味である。なほ湘中絃・湘絃怨といふも、同じである。

【詩意】涼風、そよそよとして吹き起り、月はきらきらしく光り、秋水の漲る岸邊には、竹色翠に、蘭香溼うて、まことに人の心を動かすばかり、ここに、黃陵祠下に舟を泊した征客は、この景色に

對し、夜もすがら、猿聲を聞いて、流るる涙の盡くる位、まことに、斷腸の極である。

【餘論】これは、純然たる七絶で、竹枝に近く、聲調宛轉として誦すべきも、いささか洗練が足らぬやうである。

獨不見

獨り見えず

白日沈大荒。北風下天霜。

白日、大荒に沈み、北風、天霜を下す。

羅幃猶苦冷。何況成遼陽。

羅幃猶ほ冷かなるに苦み、何ぞ況んや、遼陽に戍するをや。

別時秦槐青。今復胡草黃。

別るる時、秦槐青く、今復た胡草黄なり。

紅淚常自滋。非因效啼妝。

紅涙常に自ら滋ひ、啼妝に效ふに因るに非ず。

鴛機促夜響。龍鏡掩晨光。

鴛機、夜響を促し、龍鏡、晨光を掩ふ。

相思獨不見。時久愈難忘。

相思、獨り見えず、時久しくして、愈よ忘れ難し。

【字解】【一】白日、晴れたる日。【二】大荒、四極の地、山海經に「日月入るところ、これを大荒の野といふ」とある。【三】天霜、天上の霜。【四】遼陽、今の遼東の地。【五】秦槐、秦地の竝木たる槐、北史に「韋孝寬、雍州の刺史となり、都内を勸し、塙處に當つては、槐樹を植みて塙に代ふ。すでに修復を免れ、行旅又庇蔭を得たり。周の文帝、後見て之を知つて曰く、豈に一州のみ獨

り爾を得むや、と。諸州をして、道を夾んで一里に一樹を植み、十里に三樹を植み、百里に五樹を植みしむ」とある。【乙】胡草
 胡地の草。【七】紅淚。拾遺記に「薛靈芸、父母に別る、玉唾壺を以て涙を承くるに、皆、紅色を爲す」とあつて、血が交つた爲に
 赤い色をしたのであらう、後には女の涙を云ふ。温庭筠の詩に紅淚文姬洛水春とある。【八】啼妝。後漢書五行志に「桓帝の元嘉中、
 婦女、愁眉啼妝を作す、啼妝とは、薄く眉下を拭うて啼處の若し」とある。【九】鸞機。鸞書錦を織る機の義であらう。李商隱の詩
 に幾家錦字含淚坐、鸞機とある。【一〇】龍鏡。背面に龍を鑄出した銅鏡、異聞錄に「天寶中、揚州、水心鏡を進む、盤龍の勢飛
 動するが若し、鏡を鑄る時、老人あり、姓は龍、名は鏡と稱す。童あり、呼んで玄冥と爲す。鏡の所に至つて曰く、老人、眞龍鏡を
 造るを解す、と。爐の所に入り、戸を扇すこと三日。戸を開けば、二人の在るところを失ふ。鑄後大旱、葉法善、鏡を視る、兩大に
 謝ふ」とあり、孟浩然の青鏡歌に妾有盤龍鏡、清光長畫發とある。

【題義】獨不見は、樂府遺聲に「怨思曲」とあり、樂府詩集に「雜曲歌辭」とある。その意義に就
 ては、樂府題解に「獨不見は、思へども見るを得ざるを傷むなり」とあり、題解に「思へども見ざる
 を言ふなり」とある。現存する者では、柳惲の作が一番古く、

別島望雲臺。天淵臨水殿。芳草生未積。春花落如霰。出從張公子。還過趙飛燕。奉箒長信宮。
 誰知獨不見。

といふので、その以後の諸作にしても、どこかに獨不見の三字を填用しある處から、青邱も、矢張、
 これに倣つたのである。

【詩意】晴れた太陽は、西の涯なる大荒の野に沈み、北風颯として天上の霜を下し、陰寒自ら堪へず、

羅の幃に倚り添うて居てだに、冷氣を感ずるのに、まして遠く遼東に征戍する我が夫は、如何であら
 うか。さきに別れた時は、春の頃、秦の地の竝木の槐が、若葉の色、目さむるばかり青かつたが、今
 は秋の末、胡地の草も、黄色に枯れて仕舞つた。私が常常に涙をせきあへぬは、何も啼妝に效うて、
 わざとするのではなく、情思哀婉、自ら然らしむるのである。夜には、鸞鏡を織る機に坐して、梭
 を投ぐる響を促し、朝には、龍鏡を掩うた儘、憔悴せる顔容を映さぬ様にする。君を思へども、君
 は見えす、大抵の事は、時久しければ忘れるものであるが、これは、反對に愈よ忘れ兼ねて、愈よ心
 を悩ますのである。

【餘論】紅淚常自滋の二句、相思獨不見の二句、ともに、逆説して愈よ其情思の切なるを見るべく、
 その平板を避けた處に、技工の妙を認める。

豔曲二首

豔曲二首

日暮洪水上。折花行見歡。日は暮る洪水の上。花を折つて行く、歡を見る。

鴛鴦蘇合彈。驪鼻鏤衝鞍。鴛鴦蘇合彈、驪鼻鏤衝鞍。

【字解】【一】洪水。詩經に洪水滂沱とあり、一統志に「洪水は、今の蕪湖府洪縣、古しへの朝歌の地」とある。【二】見歡。歡
 は情郎、古樂府に風吹窸窣動、疑是所歡來とある。【三】蘇合彈。劉孝威の詩に珠丸蘇合彈、全椒青絲縷とある。蘇合は、多分、香

木の名であらう。それで造つた彈き玉。【一】 顧長 類篇に「良馬の名」とある。【二】 鑣鞍 三輔決錄に「平陵の公孫奮、官、京師に聞こゆ。鑣鞍、その儉嗔なるを知り、鑣鞍を以て奮に遺り、従つて五千萬を貸る」とある。鑣鞍とは、槁模様に鑣金を施した鞍であらう。

【題義】 豔曲は、纂要に「古豔曲は、北里靡靡陽阿の曲あり」とある。つまり、豔情を述ぶるを旨としたもので、この二首の如きは、齊梁小樂府の遺と見える。

【詩意】 洪水の邊に、日は暮れかかつた。その時しも、少婦は、路傍の花を折りながら、行く、思ふ男に逢ひたいと念じて居る。やがて、その男が前面から遣つて來たが、蘇合彈にて射て取つたる鴛鴦を攜へ、鑣鞍の鞍おける名馬に跨つて、まことに、風流瀟洒の姿であつた。

當時贈芍藥 今日歎靡蕪

當時芍藥を贈り、今日靡蕪を歎す。

少年不相顧 唯愛執金吾

少年相顧みず、唯だ愛す執金吾。

【字解】 【一】 贈芍藥 詩經に贈之以芍藥とあつて、むかし鄭國に於ては、風俗極めて淫靡で、春の末、溱洧二水の邊に遊び、男から女に芍藥を贈つて言ひ寄る様なことがあつた。【二】 歎靡蕪 夫婦別れをして居ること、漢の古詩に上山採靡蕪、下山逢故夫とある。【三】 執金吾 漢書百官公卿表に「中尉は秦の官、京師を徵循することを掌る。武帝の太初元年、更めて執金吾と名づく」とあつて、その法に「金吾は鳥の名なり、不祥を辟くるを主る。天子出でて行けば、主事を職とし、以て非常を禦ぐ、故に此鳥得べし」とある。

の象を執り、因つて、以て官に名づく」とあつて、なかなか權勢があつて、氣の利いた役であつた。そこで、後漢書光烈陰皇后紀に「后、諱は麗華。光武、執金吾の車騎甚だ盛なるを見て、歎じて曰く、仕官すれば當に執金吾と作るべし、妻を娶らば當に陰麗華を得べし」とある。

【詩意】 その昔、互に相眷戀し、形の如く、芍藥を贈つて言ひ寄り、遂に契を結んだのであるが、いつしか、男の方に飽きが來て、女を振り棄てて顧みず。女は、今しも、靡蕪を採るといつて、歎いて居る。しかし、相手の少年は、そんな事には、少しも頓著せず、この上は、天晴執金吾の官職に有り付きたいといつて、しきりに運動して居る。

【餘論】 二首とも、短章零句、その構想だけは、兎に角まとまつて居るが、これを齊梁の小樂府に比すれば、古味古色が缺けて居る。

羽林郎

羽林郎

十五能挽弓 入衛葡萄宮

十五能く弓を挽く、入つて衛る葡萄宮。

武皇深假借 父有沒邊功

武皇深く假借、父に沒邊の功あり。

秃衿繡襦短 馬逸雙銜斷

秃衿、繡襦短く、馬逸して、雙銜斷つ。

纒出鬪雞坊還過射熊館。わづかに鬪雞坊を出で、還た過ぐ射熊館。
 笑擲朱提銀。娼樓爛醉春。笑つて擲つ朱提銀、娼樓、春に爛醉す。
 歸時衝市過辟易九衢人。歸る時、市を衝いて過ぐれば、九衢の人を辟易せしむ。
 橫行自無避司隸休相忌。橫行自ら避くるなく、司隸、相忌むを休めよ。
 明日浚稽山爲君遮虜騎。明日、浚稽山、君が爲に虜騎に遮らむ。

【字解】【一】龍宮。漢書に「元壽三年、單于來朝し、上林の龍宮に會す」とある。上林は御苑、その中に在る別宮。【二】假借。宜假する、大目に見る。【三】沒邊功。邊地に於て戰没したといふ功績。【四】飛鈴。鈴は鞭、鞭が引ッ込んで居る。李賀の詩に「飛鈴小袖調鷓鴣」とあつて、輕便なる服裝と見える。【五】繡補。刺繡を施したる短衣、古詩に「美不勝布、那得繡補」とある。【六】雙術。術はくつわ。【七】鬪雞坊。鬪雞の小兒の居るところ、東城老父傳に「明皇、藩邸に在る時、民間清明節の鬪雞戲を樂み、位に即くに及びて、雞坊を兩宮の間に治め、長安の雞千數を索め、六軍の小兒五百人を選び、これを鬪戲令せしむ。買昌、木雞を道旁に弄ぶ、召し入れて、雞坊小兒となす。雞草に入れば、狎るるが如く、羖小雞、長れて鬪れ、使令人の如し、即日、五百小兒の長と爲す」とある。【八】射熊館。漢書元帝紀に「永光五年冬、上、長楊の射熊館に幸し、車騎を布いて大に獵す」とあり、三輔黃圖に「長楊宮に射熊館あり、整厓に在り」と見ゆ。【九】朱提銀。漢書食貨志に「朱提銀、重さ八兩を一兩と爲す」とあり、又地理志に「朱提は縣名、犍爲に在り」と見ゆ。【一〇】辟易。史記項羽本紀に「赤泉侯、人馬俱に驚き、辟易數里」とあつて、その注に「開張して膏處を易ふ」とある。【一一】九衢人。滿街の人といふに同じ。【一二】司隸。漢書百官公卿表に「司隸校尉は、巫蠱を捕へ、大姦猾を督す」とある。【一三】浚稽山。漢書李陵傳に「上、陵に詔し、九月を以て發し、出でて虜障を遮らしめ、東は

浚稽山、南は龍勒水上に至り、徘徊して虜を観る、即ち見るところなし。浞野侯趙破奴の故道より、受降城に抵つて、士を休ましむ」とあり、北邊備對に「浚稽山は、武威塞北に在り」と見ゆ。

【題義】羽林郎は、樂府遺聲に「游侠曲」とあり、樂府詩集に「雜曲歌辭」とある。羽林郎の字義に就いては、前に白馬篇の條に一寸解釋して置いたが、漢書に「武帝の太初元年、はじめて、建章營騎を置き、後、更めて羽林騎と名づけ、光祿勳に屬す。又從軍死事の子孫を取つて、羽林官に養ひ、教ふるに五兵を以てし、羽林孤兒と號す」とあつて、その顏師古注に「羽林は宿衛の官、その羽の如く疾く、その林の如く多きを言ふ。一説に羽の主たる所以のものは羽翼なり」とあり、後漢書百官志に「羽林郎は、宿衛侍從を掌り、常に漢陽・隴西・安定・北地・上郡・西河、六郡良家を選んで、これを補ふ」とあり、又地理志に「漢興つて、六郡良家の子、羽林に選給す」とある。そこで、羽林郎は、今の近衛士官、もしくは皇宮警視の様なものであるが、なかなか幅が利いて、大に持てたものと思はれる。羽林郎の古詞は、辛延年の作で、霍家の奴にして羽林郎たる馮子都といふものが、權勢を笠に著て、酒家の胡姬を口説いた處が、見事眩鐵砲を食つたといふことを敍してある。その以後の作も、大抵羽林郎の豪邁俊爽、まかり間違ふと、粗剛暴慢の趣を寫して居て、羽林行といふのも同じである。又辛延年の作中に胡姬年十五の句がある處から、別に一首としたものもある。

【詩意】羽林の健兒は、年十五にして、能く強弓を挽く處から、葡萄宮に宿衛することとなり、おま

けに、父は邊庭に戰没し、生前の功勳少からずといふ廉を以て、武帝は特別に目をかけて大事にされた。彼は詰まつた襟に、短き繡襦を穿ち、凜凜しき打扮をして居て、馬を馳すれば、頻りに奔逸して、無理に引き止めむとする兩の轡の斷れるをも厭はず、ヤツと鬪雞場を出たかと思へば、今度は、射熊館を過ぎ、宮禁内の要所に遠慮なく立ち入つて、見まはりをする。それから、春日、娼樓に登つて爛醉すれば、笑つて、朱提の銀錠を投げ出して、顧みもせず、その歸る時には、市場の雜沓する中を衝き抜けて通り過ぎ、滿街の人をして、覺えず辟易せしむるばかり。かくの如く、おのが意の儘に横行して居るが、司隸よ、之を忌んで糾彈するやうなことはせずもあれ、われとても、さう矢鬪に暴れ廻はつて居る譯でもなく、報國の赤心は、依然として存して居るから、明日は、遠征の軍に従つて、浚稽山下まで押し出し、君の爲に、胡騎の南下を遮つて、おもふ存分奮闘して見たいと思つて居る。

【餘論】羽林郎の材武出身より始め、その風度游行に及び、爛醉の後、市中を過ぐる有様を敘し、結末四句、その本來の志望を道うて、はじめて題意を完うした。

燕燕子飛

燕燕子飛

燕燕何處飛。相見江南路。

燕燕、何處にか飛ぶ、相見る江南の路。

鬢香細雨春。柳色芳煙暮。

鬢香、細雨の春、柳色、芳煙の暮。

纔從箔外歸。復向舟前渡。

わづかに箔外より歸り、復た舟前に向つて渡る。

莫入未央宮。身輕有人妒。

入る莫れ未央宮、身輕くして人の妬むあらむ。

【字解】【一】燕燕、雙燕なるが故に、疊んで言つたのである。【二】鬢香、唐韻に「鬢、顏同じ」とある。【三】箔外、箔は簾。

未央宮、漢宮の名。【四】身輕、李商隱の時に趙后身輕欲倚風とある。趙后は即ち趙飛燕。

【題義】燕燕子飛は、樂府遺聲に「鳥獸曲」とあり、樂府詩集に「雜曲歌辭、燕燕の詩に曰く、燕燕子飛、差池其羽、之子于歸、遠送于野」と。燕燕子飛、蓋し此に出づ。按ずるに、燕燕は、本と衛の莊姜、歸妾を送るの詩なり。江總の辭の若きは、雙燕を詠するのみ」とある。燕燕子飛の詩は、詩經邶風の首に在つて、その下に、瞻望弗及、泣涕如雨の二句がある。それから、江總の作は、

二月春暉暉。雙燕理毛衣。衝花弄葢。拂葉隱芳菲。或在堂間戲。多從幕上飛。若作仙人履。終向日南歸。

といふので、青邱も、矢張、これに擬したのである。

【詩意】雙雙たる燕子は、何處に飛ぶかといふと、江南の路に於て、現に見たことがある。折から、細雨春を溼して、白鬢香しく、芳煙暮に棚引いて、緑柳色を弄すといふ様な景色。燕子は、人家簾幙の外から歸り去つたかと思へば、再び舟の前を飛び渡つて居る。その素早くして、身の輕げなる、も

し漢宮に入つたならば、屹度、趙飛燕に妬まれるかと思はれる。

【餘論】前六句は平凡であるが、結二句を得て、いささか活趣を増した様な感じがする。

浮游花

浮游花

宛宛庭中花。

宛宛たり庭中の花、

狂風忽吹去無涯。

狂風忽ち吹いて、去つて涯なし。

上入逍遙之雲天。

上は逍遙の雲天に入り、

下没慘淡之泥沙。

下は慘淡の泥沙に没す。

開落本同何足歎。

開落本と同じく、何ぞ歎するに足らむ、

升沈偶異自堪嗟。

升沈偶ま異なるは、自ら嗟するに堪へたり。

【題義】浮游花は 樂府詩集に「雜曲歌辭」とあるだけで、題の解釋もなく、且つ無名氏の作が唯だ一首残つて居るだけである。

窗中斜日照。池上落花浮。若畏春風晚。當思秉燭游。

これは、落花を見て、春光の將に盡きむとするを惜み、燭を秉つて夜宴を催さうといふのであるが、青邱の作は、興を落花その物に託して、暗に浮生の状態を諷したのである。

【詩意】うるはしき庭中の花も、すでに盛りを過ぎたから、狂風一たび至れば、すこしも堪まらず、一まくり吹き飛ばされて、際涯もなく飛んで行く。その中の或者は上つて、逍遙に適する雲天に入り、或者は下つて、慘淡たる泥沙の中に葬られて仕舞ふ。これ等の花は、咲くも散るも、本來全く同じであるが、如何なれば、その最後に於て、一は上り、一は下り、升沈の有様が異なつて居るのか、それは、何の理由としてはなく、もとより、偶然の事であるが、自然嘆嗟するに堪へた次第である。

【餘論】結末二句、多少の諷意ありと見るべく、まさしく、失路者の怨辭である。

野田行

野田行

白楊樹下誰家墳。

白楊樹下、誰が家の墳、

火燒野草碑無文。

火は野草を燒いて、碑に文なし。

路旁尙臥雙石馬。

路旁尙ほ臥す雙石馬、

行人指是故將軍。

行人指す是れ故將軍。

樂府 浮游花 野田行

【字解】一 白楊 前にも見ゆ。多く墓地に種う。今いふゴブラ。

二 火燒野草 李益の野田行に鬼

火燒白楊とあるを翻用す。三 碑無文 石碑の文字が分からなくなつた。四 雙石馬 貴人の墓前に

當時發卒開陰宅。當時、卒を發して、陰宅を開き、
 千車送葬城東陌。千車、葬を送る城東の陌。
 子孫今去野人來。子孫今去つて野人來り、
 高處牧羊低種麥。高處には羊を牧し、低きには麥を種う。
 平生意氣安在哉。平生の意氣、安くにか在る、
 棘叢暮雨棠梨開。棘叢暮雨、棠梨開く。
 百年富貴何足恃。百年富貴、何ぞ恃むに足らむ、
 雍門之琴良可哀。雍門の琴、良に哀むべし。

は石馬を置く。史記霍去病傳の注に「冢前に石人馬あり」と記し、杜市の玉華宮の詩に故物唯石馬とある。
 【三】故將軍 史記李將軍傳に「廣、かつて、夜、一騎を從へて出で、人に從つて田間に飲み、還つて驛殿の亭に至る。驛殿の尉、誰何して廣を止む。廣の騎曰く、故の李將軍、尉曰く、今の將軍、尙ほ夜行するを得ず、何ぞ乃ち故なるをや」と。廣を止め、て亭下に宿せしむ」とある。【六】陰宅 墓穴。【七】千車 千輛の車、

史記游俠傳に「劇孟の母死す、遠方より送葬す、車蓋し千乘」とある。【八】城東陌 この陌は、阡陌の陌で、田間の隙地。そこが即ち墓地。【九】棘叢 荆棘の叢。【一〇】棠梨 甘棠や梨の類。【一一】雍門之琴 桓譚の新論に「雍門周、琴を以て孟嘗君に見ゆ。孟嘗君曰く、先生、琴を鼓す、亦た能く文をして悲ましむるや」と。雍門周、琴を引いて之を鼓し、徐に宮徵を動かして角羽を叩き、終つて曲を成す、孟嘗君、歎息して之に就く」とあつて、その注に「雍門は齊の城門」とある。すると、雍門は元と地名であつたが、後に姓になつたのであらう。なほ、文は孟嘗君の名。

【題義】野田行は、樂府詩集に「新樂府雜題」とあるだけで、説明もないが、その内容は、野田の邊

なる墓地の景を敘して、人生の果敢なきに及んだのである。その一番古いのは、唐の李益で、即ち左の通り、

日没出古城。野田何茫茫。寒狐上孤塚。鬼火燒白楊。昔人未爲泉下客。行到此中曾斷腸。

青邱の此作は、李益に比して、更に鋪張を爲し、その凄寂の趣を曲盡して居る。

【詩意】白楊の木の下に淋しく残れるは、何人の墓であるか。野火は、あたりの草を焼き、石碑の文字は磨滅して、碌碌讀めもしない。路傍には、二つの石馬が倒れて横はつて居るので、いづれ貴人に相違なからうと思つたが、よく聞けば、案の如く、むかしの將軍なにかしの墓所であるといふ話。おもへば、ここに埋葬する當時は、多くの人足を發して墓穴を開き、なかなかの大工事を爲し、そして車騎千輛、その喪を送つて、この城東なる墓地に來たことであらう。しかも、今日では、その子孫は何處かへ往つて仕舞ひ、田夫野人が遠慮なく遣つて來て、誰に斷るでもなく、容赦なく、この墓を衝き崩し、高處には羊を牧し、低處には麥を種ゑて、全くの野良と變りはてて仕舞つた。將軍生時の意氣は、安くに在るか。今では荆棘叢を爲せる處に、暮の雨降りしきり、棠梨わづかに花を開いて居る。百年の富貴も、いかで恃むべき。これに就けても、雍門周の彈じた琴の音は、この世の果敢ないことを示して、今でも、まことに哀れに物悲しげに覺える。

【餘論】結末四句は、旨意聲調、兩つながら悲惋で、一誦人をして覺えず魂銷せしめる。

壯士行

壯士行

無險非高山。無勇非壯士。險として高山に非ざるはなく、勇として壯士に非ざるは「
半夜殺風來。劍寒燈欲死。半夜殺風來り、劍寒くして、燈死せむと欲す。「なし。

【字解】【一】殺風、殺氣を含んだ風。【二】燈欲死、燈火が消えかかった。

【題義】壯士行は、樂府遺聲に「遊俠曲、一に吟に作る」とあつて、壯士吟・壯士篇なども皆同じである。樂府詩集に「燕の荆軻の歌に曰く、

風蕭蕭兮易水寒。壯士一去兮不復還。
壯士篇、蓋し此に出づ」とある。

【詩意】險なるものは、高山を最とし、勇なるものは、壯士が第一である。その壯士が、何か心に思ふところあつて、孤坐するとき、夜は將に半ならむとし、劍を拂へば、光芒人に逼つて寒く、忽ちにして、殺氣を帯びた風が、颯颯として吹き入り、燈火も消えかかつて居る。

【餘論】殺風の二字は、青邱の獨想に係ると思はれるが、まことに悽愴の極である。

邯鄲才人嫁爲厮養卒婦

邯鄲の才人嫁して厮養卒の婦と爲る

妾能擲趙瑟。舊得君王眷。妾は能く趙瑟を擲し、舊と君王の眷を得たり。

更衣直夜房。侍酒登春殿。衣を更へて夜房に直し、酒に侍して春殿に登る。

出宮非故顔。里婦猶相羨。宮を出づれば故顔に非ず、里婦猶ほ相羨む。

叢臺罷往夢。破屋流螢見。叢臺、往夢を罷め、破屋、流螢見はる。

末路多若斯。紛紛貴成賤。末路多くは斯の若し、紛紛として、貴、賤と成る。

【字解】【一】擲、説文に「指にて按ずるなり」とある、即ち指で弾すること。【二】趙瑟、瑟は琴で、今は二十五絃。趙の地で製出されるから、趙瑟と云つたのである。【三】君王眷、眷は眷愛・眷顧、御ひいき。【四】更衣、天子の御著換の御世話をする。史記外戚世家に「武帝、朝上に就し、還つて平陽主を過ぐ。すでに飲み、誦者進む。上、望み見て、ひとり衛子夫を悦ぶ。帝、起つて衣を更ふるや、子夫、尙衣に侍し、軒中に幸を得たり」とある。【五】直夜房、夜、御次の部屋に宿直する。【六】故顔、うるはしき昔時の顔容。【七】叢臺、一統志に「叢臺は邯鄲縣北に在り」と記し、史記に「趙の武靈王の築くところ」とあり、李白の邯鄲才人行に妾本叢臺女、揚蛾入丹闕」とある。【八】流螢、どこからともなく飛んで来る螢。

【題義】邯鄲才人嫁爲厮養卒婦は、樂府遺聲に「佳麗曲。邯鄲の才人あり、嫁して厮養卒婦となる、蓋し古しへ是事あるなり」といひ、樂府詩集に「雜曲歌辭」とある。邯鄲は、戦國の時の趙の都、才人は宮人の稱、それから厮僕を厮といひ、炊僕を養といふから、厮養は奴僕。この題は、むかし邯鄲なる趙王の宮中に奉仕して居た宮人が、如何なる故か、君寵衰へたるに因つて、宮を出で、人もあ

らうに、賤しい奴僕の妻と成つたといふ意。この題の作の中で一番古るいは、齊の謝朓で、その全篇は、

生平宮閣裏。出入侍丹墀。開筭方羅穀。窺鏡比蛾眉。初別意未解。去久日生悲。顛領不自識。嬌羞餘故姿。夢中忽彷彿。猶言承讎私。

胡震亨は「朓、蓋し其事を設言して、臣妾淪擲の感を寓す、揚升庵以爲へらく、この卒は、即ち趙王武臣に御として歸るもの、と。恐らくは然らず」といつて居る、次に李白の作は、

妾本叢臺女。揚蛾入丹闕。自倚顏如花。寧知有調歇。一辭三玉階下。去若朝雲沒。每憶邯鄲城。深宮夢秋月。君王不可見。惆悵至明發。

これは、李白が、その身、一旦讒誣に遭ひ、君側を遠ざけられて江湖に流落した感慨を敍したものと稱せられて居る。但し、青邱の此作は、唯だ餘り人が手を付けない古題を試作したといふだけで、格別深い意味もないと思はれる。

【詩意】私は、瑟を弾ることが上手で、その爲に、君王の眷愛を得、夜は、御著換の御世話をする爲に、御次の部屋に宿直し、晝は、御酒宴に侍坐する爲に、春の日、高殿の上に登り、まことに、人も羨む様な身分であつた。さきに一たび宮を出でて、奴僕の妻と成り下つてからは、朝夕水仕事をするので、最早むかしの俤は無い様に成つたが、これでも同里の婦人どもは、標致よしだといつて、

頻りに羨ましがつて居る。おもへば、叢臺に居て、榮華を誇つたのは、むかしの夢と成りはてて仕舞ひ、今は、あばら家の内に起臥して、しづ心なき流螢を眺めて居る。しかし、浮世の末路は、大抵かうしたもので、貴い位地に居るものが、俄に賤しくなるのは、ひとり自分ばかりではなく、紛紛として、その例は、幾らもある。

【餘論】末路多若斯の二句は、自覺の語で、この命、奈かむともすべからざるをいひ、その中に無限の感憤と悲哀とがある。

秋風引

秋風引

嗟爾秋風。

嗟、爾秋風。

胡爲來哉。

胡すれぞして來るや。

奏商律兮瑟颺。

商律を奏し、瑟颺として悲哀。

而悲哀。

叩喬柯而隕葉。

喬柯を叩いて、葉を隕し、

掃廣路以清埃。

廣路を掃うて、以て埃を清む。

【字解】(一) 商律。秋は律呂の上で商調に屬するが故に云ふ。(二)

瑟颺。韓愈の詩に、雷電過颺颺とあり、正韻に「颺、音は傘、大風なり」とある。瑟颺はシツイツで、風聲の強く凄じきを云ふ。(三) 喬柯。高

い枝幹。(四) 掃廣路。廣い大道を吹き拂ふ。(五) 清埃。塵埃を吹

入班姬之永巷。班姬の永巷に入り、
 過襄王之高臺。襄王の高臺を過ぐ。
 瑤琴自鳴。瑤琴自ら鳴り、
 羅幃齊開。羅幃齊しく開く。
 馬蕭蕭而嘶起。馬は蕭蕭として嘶起し、
 鴻噉噉以翔廻。鴻は噉噉として翔廻す。
 使崩雲駭浪震。崩雲駭浪をして、白日を震盪せしめ、
 盪於白日兮。忽欲去而徘徊。忽ち去らむと欲して徘徊す。
 客有懷鄉失職。客に郷を懷ひ職を失うて此に對するもの
 而對此者。あり、
 恨盈襟而難裁。恨、襟に盈ちて裁し難し。
 但欲變天地之。但だ天地の搖落を變せむと欲して、

【一】 班姬之永巷 班姬は班婕妤、前に班婕妤の題下に詳しく注して置いた。爾雅に「永巷は宮中の衛、又、これを登といふ」とあつて、邦語ではつば、桐壺製壺などの臺、即ち後宮の部屋。
 【二】 襄王之高臺 巫山に在る陽臺、前に巫山高の題下に述べて置いた。
 【三】 噉噉 かまびすしき形容。
 【四】 駭 断ち切ることが出来ぬ。
 【五】 盪 草木の枝葉が揺られて葉が落ちる。
 【六】 節序 季節。

搖落

不知感節序之 節序の推頹に感ずるを知らず。

推頹

秋風生歸去來 秋風生ず、歸去來。

【題義】 秋風引は、樂府遺聲に「時景曲」とあり、樂府詩集には「琴曲歌辭」とあつて、秋風に託興して、淒涼悲哀の感を述べたので、單に秋風といふのも同じである。
 【詩意】 ああ、汝、秋風、如何なれば此に吹き至るか。秋風は、物悲しい商調を奏でて、その聲、瑟瑟颼颼、洵に悲哀を極めて、到底聞くに堪へられない。秋風吹き至るや、高い木木を叩いて葉を落し、広い都大路を吹き掃つて、塵を清める。班婕妤の部屋に入つては、團扇を抛つて、その身の薄命に思ひくらべしめ、襄王の陽臺を過ぎては、朝雲暮雨、歡會唯だ夢中に在つて、その跡尋ぬるに由なきを歎かしめる。秋風の吹くにつけては、瑤琴も自然に鳴り出して、その響ただ清越、羅幃齊しく吹き捲かれて、室中愈よ物凄しく覺える。そこで、馬は蕭蕭として嘶いて起ち、雁は噉噉として飛んで還つて来る。はては、その勢、愈よ加はり、崩雲駭浪を白日の中に震盪せしめ、滿目慘澹、立ち去らうとしても、徘徊して、なほ佇んで居る。ここに、故郷を懷ひ、職を失ひ、孤獨不遇を嘆じつつ、秋風

に對するものがあつて、恨は衣襟に満ちて、断ち切り難く、どうかして、天地の搖落を變じて、陽春の長閑けさに引き戻さうとしても、それは、季節の推顔に當つて、今更致し方もないといふことに思ひ付かぬからで、いくら、あせつて見たところで、全然徒勞である。されば、秋風の生じた時は、立ち去つて、おのが故郷に歸るより外はない。

【餘論】全篇、楚騷の聲調を取り入れた爲に、臭腐を化して神奇となした様な感じがする。瑤琴自鳴より忽欲去而徘徊に至るまでの六句は、篇中の精彩であるが、結末の稍や振はぬのは、まことに物足らぬ様に覺える。なほ鍾廣漢の評に「善く太白を學ぶ」とある。

涼州詞二首

涼州の詞二首

蓬婆城下淨無花。

蓬婆城下、淨として花なし。

慘慘黃雲漠漠沙。

慘慘たる黃雲、漠漠たる沙。

卷葉誰將番曲奏。

葉を卷いて、誰か番曲を將て奏す。

白頭都護亦思家。

白頭の都護、亦た家をおもふ。

城は、西藏境に近い處で、大雪山の麓に在る。【一】黃雲、夕方の雲。【二】卷葉、即ち胡笳、史記樂書に「胡笳は、響來に似て孔

【字解】【一】蓬婆城、元和郡國

志に「柘州城、西面險阻にして、固守に易し。安戎江、蓬婆水あり、州南に在り。大雪山、一名蓬婆山、柘麻の西北に在り」と見え、杜甫の詩に「更尋蓬婆城外城」とある。すると蓬婆

なし。後世、幽薄、これを用ふ。伯陽、避けて、西戎に入つて作るところ、蘆葉を卷いて之を吹く」とあり、文獻通考に「葉を巻くは元と笳の制」とある。【四】番曲、番は蕃に通ず。【五】都護、西域鎮守の官名、漢書都吉傳に「吉、車師を破り、日逐を降し、威、西域に震ふ。遂に并せて車師以西北道を護す、故に都護と號す」とある。

【題義】涼州詞、又、涼州・涼州歌ともいふ。樂府遺聲に「都邑曲」とあり、樂府詩集に「近代曲辭」とあり、樂苑に「涼州は宮調曲、開元中、西涼府都督郭知運の進むるところなり」とあり、西域記に「龜茲國王、臣庶の樂を知るものと、大山の間に於て、風水の聲を聽き、約節して音を成し、後、翻つて中國に入る。伊州・涼州の如きは、皆龜茲の境なり」とある。すると、涼州は、その初、中央亞細亞から來た音譜で、西涼府都督が傳獻したから、涼州といひ、もとは、樂章が無かつたから、その頃、著名の詩人の作を以て填充したのである。今傳ふる涼州歌の古いものは、第一・第二・第三・排遍第一・第二といふ様に、五段に分かれて居て、それに、當時の詩を嵌めたから、もとより、意味は連續して居ない。その第二は、

朔風吹葉雁門秋。萬里煙塵昏戍樓。征馬長思青海北。胡笳夜聽隴山頭。といふので、これだけは、兎に角、塞外の光景を述べて居るが、他の四首は、宮禁だの、狩獵だのに關したものである。殊に第三の

開簾淚霑臆。見君前日書。夜臺何寂寞。猶是子雲居。

樂府涼州詞二首

は、高適の五古の結末四句を切り離したものである。そこで、後人が涼州詞を作るには、少くとも、その聲調に本づくべき筈であるが、詩人は大抵音律を知らぬ處から、さういふ譯に行かず、唯だ涼州といふ題名だけを取つて、邊塞に關した事實を詠出する様に成つた。左の數首は、即ち其例である。

國使翩翩隨旆旌。隴西歧路正荒城。氍毹牧馬胡雛小。日暮蕃歌三兩聲。

耿漳

鳳林關裏水東流。白草黃榆六十秋。邊將皆承主恩澤。無日人解道取涼州。

張籍

昨夜蕃兵報國讎。沙州都護破梁州。黃河九曲今歸漢。塞外縱橫戰血流。

薛逢

青邱の此作も、矢張、張籍等と同じく、主として西境邊塞の光景を敍したのである。

【詩意】蓬婆城下は、高寒の地であるから、四野は、さつぱりとして、花咲く草木だになく、黄昏の雲は慘慘、見わたす限りの砂磧は漠漠として居る。この時しも、蘆葉を巻いて作つたといふ彼の胡笳を吹きすすんで、耳なれぬ蕃曲を奏するは、何者であるか。その聲、極めて悲しく、白髮頭の都護までも、家 pensando、心腸を断つばかりである。

【餘論】この一首は、笳聲の悲しいことを詠出したので、笳は、即ち胡地の象徴である。

關外垂楊早換秋。

關外の垂楊、早く秋を換ふ、

【字解】「關外」關は、多分、

行人落日旆悠悠。

行人落日、旆悠悠。

隴頭高處愁西望。

隴頭高き處、愁へて西望、

只有黃河入漢流。

只だ黃河の漢に入つて流るるのみあり。

玉門關であらう。即ち中國より西域に通ずる境上の關門。【二】旆悠悠 旆は大旗、悠悠は旗のゆらゆらする貌。【三】隴頭 即ち隴山、前に隴頭水の題下に注して置いた。【四】入漢 漢は中國。

【詩意】玉門關外は、荒寒であるから、垂柳も早く秋の色に換はつて、黄ばんで仕舞つた。征人どもは、夕日の春く頃、大旗を推し立てて、しづしづと其處を練り行くのである。やがて、隴山の頂に達すると、西望して心を愁へしむるばかり、唯だ黃河の水のみ、東に向つて屈曲しつづ、流れて中國に入るのが頼母しいが、その他は、すべて塞外の光景で、全く従前見ぬところである。

【餘論】後半二句は、壯澗なる遠眺の中に無限の愁思を生じたので、この種の題に最も相應しい佳句である。

虞美人曲

虞美人の曲

明月帳中泣。悲風營外歌。

明月は帳中に泣き、悲風は營外に歌ふ。

彷徨夜驚起。何事楚人多。

彷徨して夜驚いて起つ、何事ぞ楚人の多き。

廻燈擁綠髻。向劍蹙青蛾。

燈を廻らして緑髻を擁し、劍に向つて青蛾を蹙む。

效命自無恨。君王其奈何。

命を效して自ら恨なし、君王其れ奈何。

【字解】【一】彷徨。さまよふ、去留に迷ふ様をいふ。【二】向劍。史記には書いてないが、虞美人は劍に伏して死んだので、これは、將に死なむとする時をいふ。【三】蹙青蛾。青い眉を皺める。【四】效命。命を棄てる。

【題義】虞美人曲は、樂府詩集などにも見えて居ないが、唐宋以後、虞美人草行などいふ題は、いくらかあつて、青邱の此作も、矢張類似のものである、必ずしも、これを樂府と見ずとも善いが、青邱の當時、楊鐵崖は、詠史の諸作を自ら樂府と稱して居たので、これも、聊かそれにかぶれたのであらう。史記項羽本紀に「項羽の軍、垓下に蹙す。兵少くして食盡く。漢軍及び諸侯、これを圍むこと數重、夜、漢軍の四面皆楚歌するを聞き、項羽、乃ち大に驚いて曰く、漢、皆すでに楚を得たるか、これ何ぞ楚人の多きや、と。項羽、乃ち夜起つて帳中に飲む。美人あり、名は虞、常に幸せられて従ふ。駿馬あり、名は騅、常に之に騎す。ここに于て、項羽、乃ち悲歌慷慨、自ら詩を爲つて曰く、

力拔山兮氣蓋世。時不利兮驍不逝。驍不逝兮可奈何。虞兮虞兮奈若何。
歌、數は関る。美人、これに和す。項羽、泣數行下る。左右皆泣いて、敢て仰ぎ視るなし」とあり、又楚漢春秋には、この時虞姬が項羽に和して作れる詩を載せてある。
漢兵已略地。四方楚歌聲。大王意氣盡。賤妾何聊生。

もし、この詩が確實の者ならば、無論、蘇李の唱和に先つて居るから、五言詩の元祖としても善いのであるが、何分にも、聲調といひ、構想といひ、ともに、この時代の者とは受け取れず、もしかすると、唐人詠史の逸詩ではなからうかと思はれる。

【詩意】明月は帳中にさし込んで、さながら泣くが如く、悲風は營外に吹きすすんで、歌ふが如く聞こえる。この時しも、項羽は、夜驚いて起ち、彷徨して去りもあへず、かばかり楚人の多いのは何事ぞ、もう自分の運命も、これまでだといつて嘆息した。ここに、虞美人は、消えなむとする燈火を廻らし、自ら緑なす其髻を押さへ、劍を抜いて其首に當てむとし、しかも、劍を見詰めつつ、眉を皺めて、しばし踟躕する様のいぢらしさ。私が命を棄てるは、何でもないことで、すこしも残念とは思はぬが、さて君王は、これから、どう成されると、その心の中に考へたであらう。

【餘論】絶好の題目を無造作に片づけた爲め、いささか、呆氣ない様な感じがする。これ等は、宜しく七古でも試みて、大に厭辭を放つべき處である。なほ此詩は、拗體の五言律で、起首に於て對偶を爲したから、前聯は、故らに散體を以て遣つたので、唐人に於ては、數は見るところである。

築城詞

築城の詞

去年築城卒。霜壓城下骨。

去年築城の卒、霜は壓す城下の骨。

今年築城人汗灑城下塵。

今年築城の人、汗は灑ぐ城下の塵。

大家舉杵莫住手。

大家杵を舉げて、手を住むる莫れ、

城高不用官軍守。

城高ければ官軍の守るを用ひず。

【字解】【一】大家 種種の意味に用ひるが、このは昔の衆といふ様に取るが善からう。【二】城高 城は城郭その物を指すこともあるが、このらのは、城壁と見ればならぬ。【三】官軍 ここでは張士誠の部衆を指すらしい。

【題義】築城詞、一に築城曲といふ。樂府正聲には「征戍曲」とあり、樂府詩集には「雜曲歌辭」とある。馬島の中華古今注に「秦の始皇、三十二年、讖書を得たり、云ふ、秦を亡すものは胡と。乃ち蒙恬をして胡を撃ち、長城を築かしむ。時に民怨んで勞苦し、死者相屬す。民歌つて曰く、

生男慎勿舉。生女哺用脯。不見長城下。尸骸相支柱。

後、因つて築城の曲あり」といひ、淮南子に「秦卒五十萬を發して修城を築き、西は流沙に屬し、北は遼水に繋り、東は朝鮮に結ぶ。中國内郡、車を輓いて之に餉す。後、因つて築城曲あり」と見え、ともに、長城を築いて胡虜を限るといふ其工事に關したものとしてある。樂府詩集には「又築城曲陽曲あり、これと同じからず。古今樂錄に曰く、築城相杵は、漢の梁の孝王より出づ。孝王、睢陽城を築く、方十二里、唱聲を造り、小鼓を以て節と爲し、築くもの杵を下し、以て之に和す。後世、そ

の聲を謂つて睢陽曲となす。晉太康地記に曰く、今樂家の睢陽曲は、これ其遺音と。唐書樂志に曰く、睢陽操、春牘を用ふと、是れなり。按ずるに、漢書に曰く、梁の孝王、睢陽城を廣むる七十二里と。而して、十二里と云ふ、未だ孰れか是なるを知らず」とある。すると、睢陽の築城曲は、杵で土を撞き堅める者に歌はせたのである。青邱の此作は、長城の大工事と睢陽の下杵とを打して一丸とした様なものであつて、多分、至徳十九年七月、張士誠が大に浙西諸郡の民を發して杭城を築いた其時の作なるべく、築者に向つて、その仕事を忽にせぬ様にと、激勵の意を主として述べたのである。

【詩意】去年、築城の工事に出入人夫どもは、いづれも、死んで仕舞つて、その骨を城下に暴らし、そして、白骨は霜に壓せられて、見るも傷ましげな有様である。今年、築城の工事に出入人夫どもは、今しも、仕事の眞最中で、流るる汗は、城下の塵に注ぐ位。何にしても、築城は大工事で、幾多の生靈が、その爲に苦むことは、言ふまでもない。しかし、城は、どうしても築き上げねばならぬから、皆の衆、精骨を折つて盡力し、城壁の土を撞き固める其杵を舉げて、決して手を止めてはならぬ。城壁が見上ぐるばかり高く堅固に出来れば、萬一の場合にも、官軍の防守を用ひず、城中の民は、枕を高くして眠ることが出来る。

【餘論】結二句は、作者の本志で、勸説太だ力めたものである。

平陽に豪庭す。劉聰、帝を以て會稽公となす」とある。この作の今傳はつて居るものは、無名氏の一首で、即ち左の通りである。

黃頭鮮卑入洛陽。胡兒持戟昇明堂。晉家天子作降虜。公卿齊走如牛羊。紫陌旌旛暗相觸。家家雞犬驚上屋。婦人出門隨亂兵。夫死眼前不敢哭。九州諸侯自曠土。無人領兵來護主。北人避胡多在南。南人至今能晉語。

青邱の此作は、人の餘り注意しなかつた題目を拾ひ出して、聊か其才を試みたのである。

【詩意】 蕩陰に於て、北征軍が大敗北をした時、侍中の稽紹は、惠帝を庇つて殺され、その血は、天子の御衣に灑いだ。その頃、南匈奴の五部が頻りに勢力を得て、内地に侵入し、その首領は、劉淵といひ、もと屠各族の後裔である。やがて、胡軍は、洛陽に逼り、宣陽門外に於て、曉早く胡笳を吹きすさぶ聲がしましく、今は、戟を持して皇宮を守衛するものなくして、天子は自然豪庭を免れず、その跡なる城中には、草が縁に生ひ茂つて、胡馬の嘶くに任せ、幾多の宮女は、盡く散じて皆軍士の妻となり下り、劉曜、一たび洛陽に入るや、帝及び六璽を移し、黄河を渡つて、平陽に往つて仕舞ひ、月明の夜、せめては洛陽に歸る夢でも見やうと思つても、迷ひに迷うて、其地にも行かれぬといふ始末。中原萬里の地は、今や司馬氏の有に非ず、王夷甫などいふ奴原は、その責を分たねばならぬといつて、千秋の後、なほ批難されて居る。

【餘論】 通篇、概ね敘事、吹笛、持戟、胡馬、内家等の數句は、作者の想像ではあるが、決して、虚泛でなく、人をして、當時の慘狀を臆想せしめる。結二句は論斷、全幅の精神、ここに注いで、その中に、無量の感慨がある。

神女宛轉歌二首

神女宛轉の歌 二首

駐君舟相見盡綢繆。

君が舟を駐め、相見て綢繆を盡す。

已遣大姬傾鑿落。

すでに、大姫をして鑿落を傾けしめ、

復令小婢進篋篋。

復た小婢をして篋篋を進めしむ。

歌宛轉宛轉意何長。

歌宛轉、宛轉意何ぞ長き。

願爲灰與火同泛玉爐香。

願はくは、爲らむ、灰と火と、同じく泛ぶ玉爐の香。

【字解】 一、 綢繆、纏綿の思を盡す。二、 鑿落、韓愈の詩に能傾傾鑿落とあつて、即ち酒器。三、 篋篋、立て琴。

【題義】 神女宛轉歌は、樂府正聲に「琴曲歌辭」とあり。前に宛轉行の條に於て、聊か述べて置いたが、その本事は、舊と續齊諧記に見えて居るから、下に全文を引抄することにする。曰く、劉妙容、字は雅華、吳令劉惠明の女なり。大婢は春條、小婢は桃枝、皆篋篋を善くして宛轉歌を歌ふ。相繼い

で俱に卒す。後に會稽の王敬伯といふものあり、東宮衛佐となりて、吳を過ぎ、舟を中渚に維ぎ、亭に登りて月を望み、悵然として懷ふあり、乃ち琴に倚つて、泫露の詩を歌ふ。俄にして、戶外に嗟賞の聲あるを聞く。一女子を見る。敬伯に謂つて曰く、女郎、君の琴を悦ぶ、願はくは、共に之を撫せむと。すでにして、女郎至る。姿容婉麗、綽として姿態あり。二少女を従ふ。女郎、大婢をして、酒を酌み、小婢をして、篋篋を弾じて宛轉歌を作さしめ、女郎、金釵を脱し、絃を扣いて之に和す。將に去らむとし、錦臥具・繡香囊を留めて、敬伯に遺る。敬伯、報ゆるに牙火籠・玉琴轆を以てし、悵然として別る。敬伯、虎牢戍に至る。會ま、惠明、舟中に臥具を亡ひ、敬伯の舟に于て得たり。敬伯、具さに以て告ぐ。果して帳中に于て火籠・琴轆を得たり。乃ち三女が妙容・春條・桃枝たるを知る。唐の李端、又王敬伯の歌あり、亦た此に出づ。その歌に云ふ、

月既明。西軒琴復清。寸心斗酒爭芳夜。千秋萬歲同一情。歌宛轉。宛轉淒以哀。願爲星與漢。形影共徘徊。

悲且傷。參差淚成行。低紅掩翠方無色。金徽玉轆爲誰鏘。歌宛轉。宛轉清復悲。願爲煙與霧。氤氳對容姿。

青邱の此作は、劉妙容に代つて作つたので、後の王敬伯歌とは表裏を爲すものである。

【詩意】すでに、君の舟を駐め、相見て思の丈けを盡し、大婢をして、墜落の杯を傾けて酒を酌まし

め、小婢をして、篋篋を弾せしめた。その唱へるのは宛轉歌で、その名の如く、聲調宛轉、意長くして盡さない。願はくは、私の此身を以て、灰となり、火とならしめ、君が贈られた牙火籠の中に在つて、一縷の煙と燃え上り、その匂ひを四邊に泛べたいものである。

解妾珮。相貽慰離異。

妾が珮を解き、相貽つて離異を慰む。

愁逐朝霞天際生。

愁は朝霞を逐うて天際に生じ。

歡隨秋水江頭逝。

歡は秋水に隨つて江頭に逝く。

歌宛轉宛轉情相續。

歌宛轉、宛轉情相續ぐ。

願爲絃與軫共奏瑤琴曲。

願はくは爲らむ、絃と軫と、共に奏す瑤琴の曲。

【字解】【一】妾珮。珮は佩玉で、即ち腰に佩ぶもの。尤も玉ばかりではなく襟標の物が付いて居る。【二】離異。婚を離れたる異客の情。【三】朝霞。朝やけ。【四】歡。前にも見ゆ。郎といふに同じ。【五】絃與軫。題名に「琴下、絃を轉するもの、これを軫といふ」とあつて、扭つて絃を轉するもの。

【詩意】私の腰飾を解いて、その中なる繡香囊を君に贈り、君が離郷異客の淋しさを慰めたいと思ふ。やがて、愁は、あけ方の朝やけと共に天際に生じ、そして、君は、秋水に隨つて、江頭に往かれて仕

舞ふ。今しも唱へるのは宛轉歌で、その名の如く、聲調宛轉、情思は長く續いて、容易に斷絶しない。願はくは、私の此身を以て、琴に互せる絃となり、又君の贈られた軫とならしめ、そして、ともに瑤琴の一曲を奏し、この思ひの丈を述べたいものである。

【餘論】二首、ともに事實に沿ひ、牙火籠・玉琴軫を情ひ來つた爲に、結構散漫ならずして、極めて切實緊密である。前首では願爲灰與火の二句、後首では愁逐朝霞天際生の二句、ともに、一往情の深きを覺える。

東門行

東門行

出東門暮歸來。

東門を出でて、暮に歸り來る。

入室四壁空。

室に入れば四壁空しく、

突中無煙甑生埃。

突中に煙なく甑に埃を生ず。

弱妻蓬頭稚子瘦。

弱妻は蓬頭、稚子は瘦す、

使我心下忽有哀。

我が心下をして、忽ち哀あらしむ。

安能學東方生。

安んぞ能く、東方生を學ばむ、

【字解】(一) 四壁空。ただ四面に壁がある丈で、その中には一物もない。(二) 突中無煙甑生埃。突は煙突、甑は米を入れる素焼の瓶。

(三) 弱妻。年わかき妻。(四) 蓬頭。頭髮亂れて蓬の如きをいふ。

(五) 心下。心中・胸中と同じ。(六) 東方生。即ち東方朔、下に見ゆ。

(七) 國士。一國に冠たる士、史記淮陰侯傳に「信の如き者に至りては、國士無雙」とある。(八) 身長七尺齒編貝。漢書、東方朔傳に「臣、朔、年二十二、長九尺三寸、目は懸珠の若く、齒は編貝の若く、勇は孟賁の若く、捷は慶忌の若く、廉は鮑叔の若く、信は尾生の若し。かくの若くんば、以て天子の大臣たるべし」と。上、その高く自ら稱譽するを倣なりとし、公車に待詔せしむ。奉祿薄くして、未だ省見するを得ず。これに久しうして曰く、朱儒は長三尺餘、一囊の粟を奉じ、錢二百四十。臣、朔、長九尺餘、亦た一囊の粟を奉じ、錢二百四十。朱儒、飽いて死せむと欲し、臣、朔、飢みて死せむと欲す。臣の言、用ふべくんば、幸に其體を異にせよ。但だ長安の米を索めしむる無かれと。

空抱國士才。

空しく國士の才を抱く。

身長七尺齒編貝。

身の長七尺、齒は貝を編む。

索米不得取笑哈。

米を索めて、笑哈を取るを得ず、

鷄鳴東門早欲開。

鷄鳴、東門、早く開かむと欲す。

仗劍當遠去。

劍に仗つて、當に遠く去るべし、

不乘駟馬不復廻。

駟馬に乗せずんば、復た廻らず。

妻前挽衣言。

妻は前んで衣を挽いて言ふ、

君可棄妾奈此呱。

君、妾を棄つべきも、この呱呱の孩を

呱呱。

奈かむ。

君莫憂無糧。

君、糧なきを憂ふる莫れ、

田中已生稌。

田中、すでに稌を生ず。

君莫憂無裳。

君、裳なきを憂ふる莫れ、

機中布成尙可裁。

機中、布成らば、尙ほ裁すべし。

不須苦慕富貴。須ひず、苦に富貴を慕ふを、

富貴多有害菑。富貴、多くは害菑あり。

賤妾與君生同居。賤妾、君と生きては、居を同じうし、

死即共作山下灰。死しては、即ち山下の灰と作らむと。

吾欲行爲徘徊。吾、行かむと欲して、爲に徘徊

仰視蒼天重咄哉。仰いで蒼天を觀る、重ねて咄なるかな。

上、大に笑ひ、因つて金馬門に待詔せしめ、稍や親近するを得たり」とある。【一】笑哈 哈も笑ふ、范成大の詩に推枕蕭然一笑哈とある。【二】鷓鴣 夜あけの頃。【三】仗劍 劍に隨る、史記、淮陰侯傳に「項梁、淮を渡る。備、劍に仗つて之に従ひ、鼓下に居るも、名を知らるるところなし」とある。【四】

不乘馬不復廻 一統志に「成都府城北外仙橋、司馬相如、東游するるとき、その柱に題して曰く、騎馬車に乗ぜざれば、復た此を過ぎず」とある。騎馬は四頭立の馬。【三】 嗚嗚 孩、オギャーオギャーと泣く嬰兒、書經に「辛壬癸甲、啓呱呱として泣く」とある。【四】 生稜 説文に「齊、麥を謂うて稜といふ」とある。【五】 無裳 裳は下衣であるが、ここでは衣裳の義に用ふ。【六】 苦慕富貴 苦ば、れんころにと訓ず、あくまでといふ意。【七】 害菑 菑は禍殃。【八】 山下灰 灰は塵に同じ。【九】 咄哉 咄は愚圖愚圖と不平らしき聲、世説に「殷中軍、廢せらる。終日、恆に空に書して、咄咄怪事の四字を作るのみ」とあり、韓愈の詩に咄哉、路行勿休とある。

【題義】 東門行は、樂府正聲に「相和歌辭、瑟調曲」とあり、樂府題解に「古詞に云ふ、出東門、不願歸、言ふは、士貧にして其居に安んぜざるあり、劍を撫して將に去らむとす、その妻、衣を牽いて之を留め、願はくは、共に糜を舖して富貴を求めずといひ、且つ曰く、今は時清く、非を爲すべから

ざるなりと。鮑照の傷禽惡弦驚の若きは、但だ離別を傷むのみ。長安城門は、即ち東都司門離別の所」とある。そこで、念の爲に、漢の古詞を擧げることにする。

出東門。不願歸。來入門。恨欲悲。盜中無斗儲。還視桁上無懸衣。一拔劍出門去。兒女牽衣啼。他家但願富貴。賤妾與君共舖糜。二共舖糜。上用滄浪天故。下爲黃口小兒。今時清廉難犯教言。君復自愛莫爲非。三今時清廉難犯教言。君復自愛莫爲非。行吾去爲遲。平慎行

望君歸。四解

青邱の此作も、無論、古詞の意義を沿襲したのである。

【詩意】 東門を出でて、日日、奔走に衣食し、やがて、日暮に、我が家に歸つて室中の有様を見ると、四壁山立して、中は無一物、煙突から煙も出ず、瓶中には米もなくて、塵埃が生ずるといふ始末、無論、飯も炊かない。若い妻は、氣の毒にも、髪亂れて蓬の如く、稚子は、榮養不良の爲に瘦せ細り、これを見ると、覺えず、我が胸中に悲哀を生ずる。されば、古しへの東方朔の真似をして、自ら天子に薦達することも出来ず、空しく、國士の才を抱いて、唯だ老い朽つるのみである。身の長七尺、齒は貝を列べた如く、一寸見た處から、天晴の大丈夫であるが、米を索める爲に、おどけ交りに其窮を訴へて、天子を笑はせることも出来ず、まことに、弱りはた次第である。そこで、雞鳴いて夜が明け、東門は早くも開かむとする頃、その門を出でて都を去り、劍に縫つて遠遊し、四頭立の馬車に乗

る様な身分に成らなければ、再び歸つて来ないと決心し、さて愈よ家を辭して出かけやうとする、妻は、進んで我が衣に縫つて引き止め、貴方が私を棄てて御出かけに成るは、止むを得ぬことであるが、呱呱として啼くこの嬰兒を如何されるか。君よ、糧食なきを憂へ給ふな、田中には、すでに麥を生じ、やがて若干の收穫もあらう。君よ、衣裳なきを憂へ給ふな、今、機の上で織りかけて居るのが出来れば、それを裁つて縫へば宜しい。さうまで思ひ詰めて、富貴を慕ふことは、まことに必要がない。加之、富貴は、多く災害を伴ふもので、富貴になれば、どうせ、善い事ばかりはない。私は、君といつまでも一緒に、生きては、居を同じうし、死ねば、もろともに山下の灰塵となる積り。折角ながら、旅立つことは、どうか思ひ止まつて下さいといつた。そこで、吾は、行きかけたものの、その爲に踟蹰して去りも得せず、仰いで青天を眺め、咄なる哉、咄なる哉といつて、わが身の不運を嘆き啣つ外はなかつた。

【餘論】起首より使我心下忽有哀に至るまでは、一家窮困の有様、安能學ニ東方生ニの四句は、才ありながら自ら薦むるを得ざる不遇の身世。鷄鳴東門早欲開の三句は、志を決して、東門より去らむとすることを述べ、妻前挽衣言より死即共作ニ山下灰ニ至るまでは、その行を諫止する妻の繰り言を寫し、吾欲行の三句は、その爲に、折角の決心もぐらつき出し、やがて、中止したことを記して收束としたので、全篇稍や古色古味を缺くも、情思宛轉として、自然人を動かすの妙がある。

終